

明治四十四年九月二十八日發行

十全會雜誌

第十六號

全澤醫學專門學校十全會

十全會雜誌第六十八號目次

○原著及實驗

●臟位轉錯ノ一例ニ就テ。

石橋四郎

○雜纂

●右利と左利。

永井潜

○漫錄

●其角句中の醫學。

●杏林笑詐。

●本邦ニ於ケル外科學二十五年ノ回顧。

●追懷談。

富士川游
眞葛厚卜庵
田代義德
岡田乾兒

○抄錄

●有尾類聽器ノ形態學補遺。

●「オニヒヨダクテリス」ノ水晶体。

●自家考案ノ注射器。

●筋肉附著區印象法。

●自製ノ人体內臟實寫型。

●カハール氏法ニ就テ一二ノ注意。

●標本供覽。

●惡性貧血病原論。

●單簡ナル新式手術。

●「クロ、フォルム」死。

●腹膜內「ヘルニア」。

岡島敬治
同 喜直上
石川喜直上
同 上上
金子治郎
村上庄太
佐々木達
木村孝藏
飯森益太郎
村田醇

●直腸脱ニ對スル直腸固定法。

木村孝藏

○學會

●金澤小兒科學會。●金澤醫學會。●第九師團方團研究會。私立衛生會石川支部總會。

○通信

●鈴木寬之助氏。●小山田基氏。●永井人雄氏。●韓、湯氏。●神戸通信。●名取博三氏。

○外國雜報

●墨國ニ於ケル本邦醫師。●露國ノ醫師欠乏。●米國ノ看護談。●北米及米領諸島ト本邦賣藥。

○內地雜報

●東西藥種商比較。●同賣藥小賣商比較。●島根縣學校生徒ト寄生虫。●新醫學博士。●博士ノ現在數。●醫師ト賣藥。

○醫校雜報

●各所ノ新事業。

○校內雜報

●劍道大會。●新入學生。●林教授送別會。●林教授の渡歐を送る。●講師岡本先生を迎ふ。●在外國會員の宿所。●叙任及辭令。

○人事

●山崎教授の出張。●宮田教授。●鬼頭教授。●松原教授。●高岡榮氏の昇任。●生沼曹六氏歸朝。●久保武氏。●林教授の新任と留學。●岡部千太郎氏。

○會告

●校外特別會員會費領収報告。

嫁シ在リ健存血族中畸形兒等ナシ

一、既往症 幼時癩癧質斯ニ罹リシト云フ他著患ニ罹リシコトナキモ僅カノ勞働ニ依リ心悸亢進ヲ覺ユ故ニ小學校在學中既ニ駢步競爭等ヲ好マザリシト云フ煙草及酒ヲ嗜マズ

一、現症 體格榮養共ニ中等身長五寸二寸八分體重十四貫目視力聽力等ニ異常ヲ認メズ鼻腔ハ輕度ノ慢性鼻加答兒ヲ有ス四肢ハ左右對等ニ發育シ異常ナシ乳部及生殖器等亦異常ナク墨丸ハ左墨丸右ニ比シ下垂ノ度強シ脉搏ハ小ニシテ軟且ツ稍ヤ頻數ナリ胸部視診上心尖搏動位ニ認メズシテ右乳線外一指横徑ノ部ニ於テ之レヲ認メ觸診ニ際シ心尖搏動軟弱ナルニ依リ其ノ右胸心ナルト且ツ心機能ニ異常ノ存スルコトヲ疑フヲ得タリ打診上心臓ハ胸骨右緣ヨリ上ハ右第三肋間外側ハ右乳線ノ稍ヤ外側一指半横徑ノ部以內輕濁音ヲ呈シ上ハ第四肋間外ハ乳線ヨリ半指外側內ハ胸骨ヨリ一指横徑外側ヨリ濁音界ヲ占ム聽診上心音ハ一般ニ弱ク且ツ清澄ナラサルト心尖部ナ右乳線部ニ置キ各辨口ノ位置恰モ生理的位置ト其ノ位置ヲ左右相反セシメタルモノニ相當ス加之心尖部ニ收縮期的雜音ヲ聞ク

肺臓ハ打診上其ノ下緣ニ於テ左肺ハ正中線ニテ劍狀突起ノ基底ノ高サ乳線ニテ第六肋骨中腋窩線ニテ第八肋間肩胛骨內緣ノ延長線ニ於テ第十胸椎棘狀突起ノ高サニ達シ以下濁音ヲ呈ス右肺ハ恰モ普通ノ左肺ニ於ケルガ如ク前胸ニ於テハ前記ノ心臓ヲ包擁シ腋窩線背部ハ左側ト等シ聽診上及聲音振盪呼吸運動異常ヲ認メズ即チ右肺ト左肺ト其ノ位置ヲ轉換セルモノト認ム肝臓ノ位置ハ其ノ濁音界モ亦左ニ有シ其ノ上界ハ中腋窩ニ於テ第八肋間ヨリ前ハ乳線ニテ第六肋骨正中線ニテ劍狀突起ノ基底ノ高サ後ハ肩胛骨內緣ノ延長線ニテ第十胸椎棘狀突起ノ高サ以下ニ占メ其ノ下界ハ左乳線及中腋窩線ニテ季肋部ニ肩胛骨內緣ノ延長線ニテ第十一胸椎棘狀突起ノ高サニ位ス觸診上其ノ下端ヲ季肋部ニ於テ觸ル、コト能リズ即チ右側ニ存スル關係ヲ其ノ體左ニ移シタルモノト認ム

胃ハ膨滿試驗等精密ナル検査ヲ缺クモ打診上下界ハ背位ニ於テ臍上二指横徑ニアリ(検査時午前十時頃)之レヨリ左側ノ鼓音界ノ大サヨリ右側ノ方大ニシテ乳線ニ達ス故ニ之レ亦左側ニ幽門ヲ有スルニ非ラザルヤト推測スルナリ

直腸試驗ヲ缺クヲ以テ述ベ難シ
以上ノ諸症ニヨリ臟位轉錯症ニシテ慢性心内膜炎ヲモ兼タルモノト認ム依テ本症ノ一例ヲ追加タルモノナリ
稿ヲ終ルニ臨ミ軍醫分團弘前研究會七月例会ニ本症ノ二例報告アリト聞クヲ以テ茲ニ附記ス

* * * * *

雜 纂

● 右利と左利

(發進醫會列席上に於て)

醫學博士 永 井 潜

第一 左右相稱の基源

吾人の身體は大體に於て、左右相稱なれども、その間に亦不相稱の存するを見るは興味あることなり。動物の最も原始的なる形は、一定の相稱又は排列なきものあり、例へば「アメーバ」海綿動物の如きは是なり。漸次高等とあるに従ひ、點線或は面の周圍に器官が相等しき排列をなし、隨て之を等分

すべき面の數は、動物が高等であるに従ひ、漸次減少するに至る、例へば放散類と呼ばれるものゝ如きは、體器官の排列は、一點を中心として周圍に相稱的の置かるゝが故に、苟も其點を通る面あらんば、何れも之を等分するを得べし。進では體に於て一定の軸定まり。此の主軸の兩端に於ては、器官の發達趣を異にし、一方が口、一方が肛門と云ふ如き排列を生ず、例へば「クラゲ」の如し、されば體は、この主軸を含める平面によりて等分せらるゝに至る、從て之を等分すべき面の數は、前者に比すれば、大に減少すべし。更に進めば、體に三の軸を設くる得。一は縱軸即ち主軸にして口と肛門との軸であり。二は矢狀軸にして縱軸と直角をなす前後の軸あり。三は横軸にして左右の軸あり。而して各軸に於て夫々器官の排列を異にするを以て、體を等分すべき面は、主軸を横軸を含める面が、若くは主軸と矢狀軸を含める面に限らる。然るに一層進めば、獨り縱軸のみならず、矢狀軸の兩端に於ても亦器官の發達趣を異にするを以て、體を等分すべき面は、縱軸と矢狀軸を含める唯一の面に限らるゝに至る。斯く動物の系統發生の順序に従ひて觀察し來れば、動物の高等であるに従て、等分し得る面は漸次減少するを見る。

更に個體發生的に之を見れば、卵にありては圓形に近くして、一點を中心として、之を等分すべき面甚多し、尤も卵の各部分は相等しからずと云ふものあれども、兎に角卵より發達が進むに従て軸が定まり、隨て體を等分すべき面の數は減少するを見るべし。然而して發達せる脊椎動物に於て見るに、動物の官能を營むべき骨格、筋肉、神經等は相稱的なれども、植物の官能をなすべき内部臟器を見るに、何れも不相稱あり。是れ狭き範圍内に廣き表面を有せんことを力め、彎曲又は皺襞を生ずればなり。然るに外部器官にありては相稱なるが便なり、運動をするにも左右相異なるは不便なり、感覺にありても右に感ずるさ左に感ずるさ同じからざれば不便あり、されど外形にありても、吾人の考へ居るよりは遙に左右の差異しきものあり。

り。必ずしも全く相稱ならずして、吾人の氣附かざる所に左右相違の點存するを見る。

第二 人類に於ける左右相稱の研究

顔面及び頭部に就て見るに、ヘンケ氏は有名なる「ミロ」のウェーヌスの像の頭の大に不相稱あることを測定し得て、此點に於てこの作物は大に藝術的價值を存する者とせり。次てハッセル氏も亦同じく此の社像の顔面の不相稱あるを知り、且つ實際吾人の顔面の不相稱あることを測定し、斯くして作者の觀察の細密なるに敬服せり。通例吾人の頭は、左半が右半よりも大にして、顔はその反對に右半が左半よりも大なるを常とす。リープライヒ氏は之に三種の「タイプ」ありとせり、就中顔面の左より右に傾れし如き形最も多し、かゝる形を生ずる原因は、母胎に於ける胎兒に位置は第一頭位最も多き爲からんと云ふ。即ち其際は、胎兒は普通その左半が母の脊柱に向ひ、右半が腹部に向ふ故あり。

脊柱に就いて見るに小兒には正規的之を示す者頗る多し、ウイツセル氏は五百十五人の男女生徒中十八人の病的なるものを除き四百九十七人中尙五〇・九%の曲れるを見たり。是れ何も生理的に彎曲せるものあり。クルーグ氏は八歳より十七歳に至る一千四百十八人の學齡兒童中病的なる十三人を除き残り一四〇五人中二四%の脊柱の曲れるを見たり。大人にありてはハッセル、デーナー氏によるに五千一百四十一人に就いて六八%は曲り居り僅か三二%だけか眞直の脊柱を有するを見たり。而して彎曲せる方向如何といふに小學期兒童にありては主として左に曲り、大人にありては腰にては左、胸にては右に曲れる者尤も多し。何歳頃より彎曲の現象あらはるかといふに、極めて幼少なる者にありては、著しく彎曲せず、七歳頃に至りて初めてあらはる。その原因に關しては諸説あり。(一)兒童の生長するに際し左右の生長の不同あるより起る。(二)脚の長さの左右等しからざるより骨盤下りて之が爲めに鈎合を取らんとして脊柱の曲るあり。(三)外部

的原因として、机、腰掛、荷物の運搬、職業等に關係あり。斯くて生長する頃に多少變化眞直なる脊柱を有する者は却つて稀となる。殊に年齢の長するに従ひて其度益々甚だしく、エマー・ペレン氏は大人の屍體に就いて百中僅に七のみ脊柱の眞に正しきを見たるのみと云ふ。

肩は右の低きを常とす。右の上肢が左よりも重ければなり。胸椎の彎曲せる方向之と直接の關係を有す。

胸廓も右半が左半よりも大なり。右肺が左肺よりも廣ければなり。

上肢に就いて見るに即ち右利左利の現象あるあり。系統發生的に之を調査するに動物にありては未だあらはれざるが如し。獅子、馬、鸚鵡、駱駝等に之ありと云ふ者あれども果して然るや訝かし。人類に最も近き猿についての調査の結果も或人は右利と云ひ、或は左利と云ひ、人類に於ける程確實に知るゝ能はず。大澤博士は犬等に就きて之が觀察を行はれ猿に於ては多少右利左利の差別の認むべき者あるを報告せられたり。然れども其區別は人間に於て始めて明に表はる者にして是れ實に人類の特徴と見て可あらむ。

第三 原始時代に於ける人間の右利左利

原始時代の人類は如何なりしか。之を調査するには古代の器具と繪畫と骨格とによるの他なし。石器を研究してその右の手にて用ひられしか左の手にて用ひられしかを見るに、勿論右にて作り右にて用ひしが多けれども左かるも頗る多し。石器を鑿造するも右手のみにてすれば直に看破せらるゝ程あり。今日の人には一乃至四、五%の左利あり。然るに太古の人には三三%の左利ありといふ。此研究の結果によりて昔に於ては左右共に殆ど同様に用ひられしを知るに足るべし。次に繪畫に就いて見るに、人の横顔を畫くには右手にて畫けば左向きなり、左手にて畫けば右向きなるを常とす。而して左の横顔多けれども右向も亦多ければ、左利も多かりしを知るべし。即ち今日よりも左手を用ひ得ること大なりしからむ骨格に就いても

多數は右の骨が左の骨よりも重し。但今日程その差大からず此點より見るも左右兩手を用ひ得しものならんと思はる。

個體發生的に見れば、バルドウィンによれば五月乃至九月月に於ては近き物を取るには右左の手を出すこと殆ど同じ程なれども、遠き物を取らしむれば八十回の中七十回は右手を出し、左手を出したるは僅に六回に過ぎざりといふ。而して十三ヶ月目より右利の徴候顯著とある是に由りて觀るも前に述べたると同じく初には左利右利殆相等しく漸く右利に傾くを知るべし。

第四 現代人の左利右利

現代の人に就きて右利左利の割合如何と云ふに學者によりてその説一致せず。四・四%、四%、二乃至三%、等の説あり、平均一乃至四・五%と見て可あらむ。八%、二%等の説もあれども極端あるものにして取りがたし。手の長さ、重さ、大きさの比較によれば、右の左にまさるは言ふ迄もなく、右手の骨は左よりも一仙迷長く血壓も右手が高しと云ふ。

形體上より云へば、左利は一〇%ありて然るべきを示せり。(七%、八%、一二%等の説もあり)然るに實際機能上より統計すれば、僅に一乃至四・五%の左利あるのみあるは何故あるかと云ふに蓋走れ左利とあるべき素質は一〇%位あれども教育と習慣との力によりて感じたる結果あり。

第五 右利の原因

多くの者にありて右手さるる原因は何ぞや。之に諸説あり。第一には血管分布の相違より來るあらんといふ。是オーグル、リュウ・デッケンス氏等の説く所あり。その説によれば右頸動脈よりも左頸動脈に多量の血液の入り易きは解剖上明からざる所にして、しかも靜脈にありて解剖學上血管分枝の状態ありしも左頸靜脈が右頸靜脈よりも血液の歸流は困難なり。之を以て腦髓の左半は右半に比して多量の血液を滯溜し、右よりも長く發達す。さればその發達せる左の腦の支配せる右手が左手よりもよく發達して力強

くあるは當然の事あり。左の腦が右に比して血壓高き事は何の眼に於て近視若くは遠視が多く來たるかの統計的事實によりても亦之を確むるに足るべし。即ち論理上は遠視近視に就ても同様の事實あり。眼内の壓高ければ遠視となり低ければ近視とあるものあるが事實上右眼の近視が左眼に比して遙に多數あり。又は兩眼共に近視ならば右眼の方度高きを常とす

以上の説は右利の説明として有力あるに似たれども、ゴリラ海豹の如き動物に於て血管は人類と同じきもさほど右利はなれる事實なきが故に未だ満足ある説明と云ふべからず。左の大腦は右よりも發達佳く、こゝに言語の中樞ある事實あり。されどこれ大腦が發達したる爲に言語の中樞を生じ、右利を生じたるか、或は右手が發達したる爲に左の大腦が發達し、そこに言語の中樞を生じたるかは明らかならず。

第二に母胎に於ける胎兒の位置によるとの説あり。コント氏の唱ふる所あり之れによれば胎兒二萬五百の中一萬九千七百は通常の頭位にあり。就中第一頭位即ち前に述べたる如く胎兒の左半が母の脊柱に向ひ、右半が腹部に向ふもの一萬七千二百ありて之に反する第二頭位は僅に二千二百に過ぎず。さらば一％の左利あつて然るべきあり。この説も右利左利の原因を説明し得る如しと雖、右利左利の原因が一年後に於て初めてあらはるゝは何故あるか。未だ満足ある説明とすべからず。

その他兒童の抱き方、寝かせ方、右左の重さ(右の方に重き肝臓あり)等によりて右利を説明せんとする者あり。最後に有力ある考は人間の直立歩行が最初の原因ならんこと云ふ説あり。上肢はもと身體を支ふる機關かりしに、直立歩行するに至りて之が自由の機關となり、殊に戦争に於て手を用ふるには兩手を用ふるよりも隻手を用ふるを便す。石を投ぐるにも食物を取るにも一方は豫備に具ふるが便あり。而して特に右手を用ふる所以は左手は以て重要ある心臓を防衛するに便あればあり。爾來右手を用ふることゝかりたれども動物又は兒童には未だ右利の現はれざるあり。然らば心臓は

何故に左に偏したるか。動物にありては心臓は胸骨にて支へらる。然るに人間の如く直立歩行するに至れば自ら心臓は下らざるを得ず。その下りて横隔膜に止まるや、左肺の右肺に比して小なる等の原因よりして左に偏したるものゝ如し。

第六 脚部の正規的不相稱

下肢即ち脚部について見るに右手利は左足利なり。四足獸の歩行するを見ても右手と左足、左手と右足の兄弟あるを知ることを得べし。普通吾人の注意を惹かざれども左右の脚部の全く同しき者は殆どなく、何れか一方(多くは左)の他方よりも發達せるは明らかなる事實あり。かのチルケル、ベーグングと稱して夜中方角の立たざる廣き原野或は湖上を行く者の直進すと思ひ乍らその實循環運動をなすことは人に於ても兎等に於ても屢々あらはるゝ現象あり。是れ視覚が完全に其働をなし方角を誤らぬ時は體の各半に各適當に運動を起さしめ思ふ所の方向に進み得る者なれども此作用なき時は自然發達佳き方の脚は他側に比して運動の速度大なるを以て、進路は勢ひ大なる環を描くに至るあり。

第七 眼の左利右利

眼についても右利左利さあるべし。普通は左利のみにて文字を讀むよりも右利にて讀む方(兩眼にて讀むには如かざれども)早く讀むを得べく且その印象も確かり。(刀圭新報抄)

* * * * *

漫 録

● 其角句中の醫學

富士川 游

晋其角は醫家に生まれ、自身も父の業を承けて初め醫を修めたのである。その師たる草刈三越といふは、羽州の人で、江戸に業を開き、所謂學醫を以て當時に聞かぬ人である。皇國名醫傳などには、漏れて居るが、しかし其著述を見るに、中々見識の高い學者で、固より名醫傳中の人物であるから其角がこれに親炙して受けたる感化も著しかつたと思はれる。三越の著述「醫教正意」四冊は、其角が三越の門に入つた年の翌々年（延寶六年）に上梓せられたのであるから、當時の狀勢より推して考ふるに、其稿本は其角入門の當時既に出来て居て、其角もその講釋を聞いたに違ひない。三越の「醫教正意」は五運六氣の説に基きて論を立て、天人合一の理を唱道して、遂に易醫論に及びて居る。所謂後世家の別派で、一方の旗頭と見るべきものであるから、其言行の尋常で無かつたことは大概想像せられる。其角が此の師匠から受けたる感化はどの位であつたか、固より之を明にすることは出来ぬが、尠なくとも、其角は其師の説を聽きて、治療の方術より、もうの理論を喜びて、心をこれに傾けたであらふ。然らば、其角の俳句を調べて見て、それに依りて其角の醫學の智識の程度が、たゞ一斑でも窺はれるかといふに、其角の俳句の中に、疾病に關するものは

續 虛栗集

○さ月待加茂の祭の高からん 破 笠
○瘡落ちよき櫛いたしき 其 角

神佛に祈りて瘡を治することは、我邦俗間にても古くより行はれたれども、醫書にも「外臺秘要」に「許伯仁曰、此病別有_三祈禱厭禳而愈者」と記し、鎌倉時代の醫書「萬安方」「頓醫抄」以下にも呪術にて瘡を治することを擧げ、之を俗間の説のみと見るべきでは無い。其角の時代より百餘年の後、文化又政年間、原南陽が著述したる「叢柱亭醫事小言」にも杜子美が詩句「子璋觸穢血模糊手擲提還佳大夫」を書し水服すれば瘡を截るのみにあらず、狐狸も畏ると云ふことを揚げたるを見れば、此の如き治瘡の方も、當時の醫學社會に行はれたるものと見て誤ばないのである。但し瘡を截るといふべき術語を瘡を落とすといふ俗語（？）にしたのは如何であるか、又何時頃よりこの語が行はれたかは、猶ほ調べて見たいことである

續 虛栗集

○癩のものうき富の世を悟り 破 笠
○柴の戸深く維摩聞くらん 其 角

癩病は先生の罪業により、神佛の冥罰のために起るものであるから、所詮善根を修し、懺悔をふして善を修すべしといふことは、鎌倉時代「頓醫抄」以來醫家の間に行はれたる説で、癩病を不治の業病とし、只管佛に頼りたることは元祿前後にも猶ほ行はれたるものと思はれる

花 つみ

○狐着衾に狂ふ月のかけ 其 角
○狐の琵琶の折からの秋 溪 石

狐つきの説は、「今昔物語」にも出て居るが、これに狐憑の名を附し、醫書に載せたのは香川修庵の「一本堂行餘醫言」が始めてであるから、寶曆明和時代以前は勿論醫家も狐付の稱呼を用ゐて居つたのである。しかし俗人は狂疾を見て直ちにこれを狐付とすることは多いから他の狂疾と狐憑症とは

常に混同せられたが、其角の謂ふ所の狐着は、狐憑であることは、同じ集（花つみ）中に『伊勢の國にて狐の人につきて云出ける句』『此狐つき日比の田夫にてぞありける、狐にて後は無事なりし也』と記したるにて、明である

五元集

雁瘡のいゆる時得し御法かふ

貞享三年刊行の「病名彙解」に「雁瘡、俗に云ふガンガサなり」と記し、「病源候論」を引て、「此瘡を得るもの常に春秋二月八月に在り、雁来るときは發し、雁去るときは便ち癒ゆ、故に以て名とす」と擧げてある

五元集

茸狩や山のあふたに虚勞病

虚栗集

蛸の虚勞すゝしくふりにけり

雨兩親の留守を慰む

其角

子

「病名彙解」に「虚勞は勞咳の症あり、元氣不足により心腎缺くるとあつて、或は氣血を勞傷し、或は酒色過度して漸く眞陰虧損するに至て、相火隨て旺す火旺するときは眞陰を銷燦して嗽をふし、喘をなし、痰をふし、熱をふし、吐血衄血をなし、盜汗遺精をふし、云々」と説てある。これが其角時代の醫學社會に行はれたる虚勞症の定義及び病理である

若葉合

げぢく亭主も居直りて

蛸蛸が餅ふりて髪が禿げるといふことは、當時俗間に専ら行はれし説と思はれる。漢名に鬼頭といふのは則ちこれ、「類聚和名鈔」に「病源候論」を引て、鬼頭を擧げ、「註に師説爲三天狗下食一所禿是」と記してある。又鷹取秀次の「外癩新明集」（天正九年）には「鬼頭と云ふ足長き蟲れぶりて、はぐる事ある」と記して居る。其病症は圓形禿髮症で、今日の俗に

所謂臺灣坊主に外あらぬのであるが、前にも言ふ通り、其原因は或は天狗下食の蟲ぶるために生ずといひ、或は鬼頭といふ蟲の蟲ぶるために生ずといひしが、何時の間にか、蛸蛸の蟲ぶるためであるといふことになつたので、「病名彙解」（貞享三年）には「鬼頭、敵子ナルと讀めり、俗にゲジゲジが禿ると云ふが如きものあり」と載せて居る

五元集

夏の夜は寝ぬる疝氣の起りけり

續五元集

蒜にたへて疝氣のふかりけり

若葉合

誰も疝氣を背から腰

疝氣の名は、素問に出て居て俗稱では無い。貞享三年刊行の「病名彙解」に「疝氣、俗に下風と云へり」と記せるを見れば、貞享年間を距ること遠からざる元祿頃にも醫家が疝氣といふものを俗人は下風と名づけたことと思はれる。元祿時代頃の醫學の師宗とした朱丹溪の「醫學正傳」に「疝氣者、睪丸連二小腹一急痛也」と説き延寶六年刊行「醫方聚要」（當時盛に行はれたる醫方書）にも疝氣の一部門を設けて、委細にこれを論じて居る

續五元集

妹それむ姉や貧しき

風に吹れてかるい瘡瘡

煤掃に笠も薪もかたつけて

打身に酒を是藥ふりて

魚尾琴

白禿のふほるばかりをころも更

駿足も痔には任かせぬ鞍の上

小繩ふす世間ふみさて下り腹

俳諧錦繡段

目病みとも門に立ちたる朝日影

花つみ

憂目やむ洗薬もふみたふり

句兄弟

氣につれて小便濁る秋の暮

大抵、右の標を句で、殊に取り立てて云ふべきものは見當らぬ。又もとより句の数が多く無いのであるから、これだけで以て、其角の醫學的知識の如何を論ずることの出来ぬは無論であるが、しかし右の諸句中に見られた所だけで、考へて見ても、其角に醫學の素養があつたことは明瞭である。

かも知れぬ。其醫學が後世家別派であつたことも確かに想定せられるのである。
 ところが、其角が齡十四歳の時に延寶二年で、草刈三越の門に入つた前々
 である。されば其角は父の東順の計にて、多少醫書を讀み、本草に興味
 をもつて、遂に本草綱目を寫すに至つたものかと思はれる。

末若藥

製白礬とて

明礬のふはくにある炬燵哉

是
橘

北枳南橘のたとへの如く父が醫ふれば術を習ひ予か俳諧をいへば此句をつぶやく三遷のかしこきためしにはあらであらはんよりは馴たるもやさし

河豚汗に又本草のはなしかか

其角

全體、本草の學は、藥物の名稱を正し、其功能を研究するのが主で、大寶令には其旨もあつたが、中世この科は廢たれた。然るに慶長年間李時珍の、「本草綱目」が渡來してから、再びこの學は開て、寛永十五年に江戸に藥園

が出来、本草の名家も現はれた。それで學醫と稱せらるゝには本草を修むることは必須であつた。其角が文に『父が醫あれば術を習ひ』とて、本草の事を心得て居るといふのは、所謂學醫の事である。其角が句に

五元集

香霏散犬かれふつて雲の峯

香需散といふのは、もと支那の「和劑局方」に出でたる方で、此方は夏月暑邪に中り、腹痛霍亂吐瀉し、或は旅中卒に暑熱に感じて卒倒するなどを治する靈方として専ら用ひられたものである。我邦にては鎌倉時代より此等方は霍亂に用ひられたのであるが、足利時代を経て、徳川氏の初世に及び、元祿の頃に至りては、此藥(多少變方して)は廣く民間に行はれ、茶に代て之を飲むほどになつたといふことは、元祿十二年刊行香月牛山の「方考」に

『世醫此方に加減シテ、或ハ家傳ト稱シ、或ハ秘方ト稱シ、夏月ニナレバ諸人ニ賦リ與フ、本朝ノ風俗トナリ、代々茶ヲ飲レ之或ハ夏月ニナレハ毎朝一望シテ豫メ防ト暑ト、此注額ノ說ニ本ヅキテ俗ナナスナリ、云々』
 であるので明かである

五元集

病中制禁好 橋桁の串海鼠はつすや月の友

禁好物を諸病に就て、八釜數言ひ立つるに至つた始は、鎌倉時代のことであるが、徳川氏の初世の頃から、溫補の治術（後世家醫方）が盛に行はれたるより勢ひ禁好物のことも治術の主要なるものとなり、諸病の禁食（禁物）宜食（好物）をいふことが八釜數かつたのである。

俳諧錦繡段

川芎の香に流るゝや谷の水

焦尾琴

床入りに守りをされは鏡おほる

對馬へかこつ人參の橋

其 其
角 零

續虛栗集

川盡て鰯流るゝさくら哉

露 沾

黃精

ある峽の日の朝

其 角

本草に關する句は、割合に多い。而して此位の資料でも、其角が醫學の内で、本草に興味をもつて居つたといふことは判斷せられるのであるが、當時の狀勢で、本草の研究をしたのは所謂學醫であつたから、其角もまた所謂學醫であつたものと思はれる。

醫學家としての其角を研究すべき材料は、其句中に、割合に多いが、これは問題が違ふから、こゝには何もいふまい。たゞ一まつ序に記して置きたいことがある、それは次の一事である。

嘗て獨逸にゲーテ、シルレルの二大詩人があつたが、ゲーテは醫家にあらずして醫事を説き、シルレルは醫學のドクトルでありながら醫を罷めて哲學及び文學の教授さあつた。我邦の文人の中で曲亭馬琴が丁度ゲーテの風で、吾其角は彼のシルレルと同様である、余は常に思ふのである。それらの事は勿論本題に關係のない事である。(完)

歸 休 庵

夏 瘦 や 捉 迷 藏 の 人 の 肩

(刀圭新報抄)

●杏林笑話

眞葛原卜庵

一 國母の手術

有名なザーフエンバッハが普國皇妃の手術をせねばならぬ事があつた、處が侍醫のルストある者がザーフエンバッハに私語して曰く君！何卒しつかり頼みますよ、君が今手術せんとする人は即ち國母である、君は即ち其國母

たるべき大君に刀を加へる事であるから、十分の注意を以てやつて貰はねばならぬと云ふた、然るにザーフエンバッハの答が振つとる、「ソオカナ！僕には君の云ふ事が解らない、僕は刀を手にしてイザ手術臺に臨まんする時には、僕の眼前に横る所の人體は即ち憐むべき同胞であると思ふのみであつて、其人が果して社會に於て如何なる位置に居る人であるか云ふことは僕に於て關せざる所である」とやつたには、流石の侍醫も返す言葉も無かつたさうだ。

二 醫者の手後れ

患者 先生私は今日〇博士に診察して貰ひましたが、あふたが全然誤診して居られたが爲に、も早手遅れだと申されました。先生非道いではありませんか、どうしてくれます。

醫者 左様か、それでは早々これ迄の藥價の書付を上げませう、手遅れにふると私が困ります。

三 ベツテンコーヘルの健忘

獨逸化學會雜誌に、ベツテンコーヘル氏の逸事として面白い記事があつた。

有名なるベツテンコーヘル氏も亦學者的健忘の行跡があつた。彼は外出する時に傘を持つて出れば、必ず何處かに忘れてしまつて持て歸らない。家族の者に『あふた傘は』と言はれて、始めて氣が付くのが常であつた。或る時英國へ旅行した事があつたが、此時には珍らしく傘は忘れずに持つて來た、アウグスブルヒと云ふ處まで來て、家族の者に左の電報を發した

余及び余の傘は無事

處で彼が家に著した時には、傘は手に持つて居あかつた、家人に注意されてはじめて氣付いた。あれ程電報まで發した傘は、何處に忘れたかと考て見ると、成程アウグスブルヒの電信局に忘れたのであつた。

●本邦に於ける外科學二十五年の回顧

(明治四十四年三月五日第二十回醫家先哲追薦會
席上ニ於テ)

醫學博士 田代義徳

序言 自分が東京醫科大學を出たのは丁度明治二十一年であるから纏て滿二十五年にある、西洋には其例のある事であるから、日を期して當時の卒業生一堂に相會し卒業滿二十五年の祝宴を開かうと企がある、併し唯だ集まつて飲んで食つて話して夫れで別れるのでは興が薄い許りでなく、寧ろ甚だ無趣味のものである、そこで各自此二十五年の間に得たる醫學の各科に互る實踐の道程を記載して後日の紀念に残したら甚だ有益あると自分思つて居る、若し此計劃が行はれたらば某氏は内科某君は眼科自分は其専門の立場からして此歳月の間日本に起つた外科の變遷と云ふものを普通の編年體でよく調べ上げて見たら嘸う面白からうと頻りに思つて居つた處に、獎進醫會の藤根君が來られて獎進醫會で近日第二十回醫家先哲追薦會を催すから最近に於ける外科學の進歩を話して呉れぬかといふに頼みであつた、其時不圖この事を想ひ起して輕卒にも快諾をしたのであつた、此依頼に應じたのは纔かに數日前のもて後から深く考へて見るに決して容易の業ではない、腹案は既に十分出來て居るがさて色々自分も調べ人にも聞き合せて夫れを組み立てるには相當の時日を要する、それで今日は唯だ自分の記憶に存する儘を思ひ出し、秩序もかく順序もかく話さうと思ふのである、云はゞ雜談である、併し事實は凡て自分が親しく目撃耳聞したものであるから亦多少の興味あるを信じて疑はぬ、猶一つお断りしたいのは自分の此話は古いと云つても實は僅かに二十餘年前のものである、現に小生と當時を経歷したる大石榮三君なり岡田乾兒君なり茲に出席して居られ、

又先輩たる多くの人も居らるゝから聽く人によつてはサツパリ詰らぬものかも知れぬが、自分は其頃丁度養父の起した『醫事新聞』の編輯にも與つて居つたから、醫學界一般のことに亘つて諸君に比して多少より多くを知るの便宜があつたと思ふ、又事の大學に關係あるものは幸にも其頃小使として實際を知つて居り今日は器械係として大學に勤續する安西と云ふ者があるから夫れから親しく聞いて一々自分の記憶に誤りが無い、何うかを確めたのである。

スクリバ先生の手術

自分が卒業した當時はスクリバ先生は丁度賜暇歸國中で外科志望の自分は一年間(明治二十二年)佐藤教授(三吉)の下に助手を勤め次で明治二十三、四の二年間スクリバ先生に師事したのである、そこで此話は最初は學生として接近し、後には助手として知る同先生の手術から始めよう、全體元の第一醫院は丁度今の病理學教室あたりの一帯の地にあつて建物が見て三棟あつた、其西の一棟が内科、東が外科、前の一棟が教室、外科手術室及び病室の一部であつた、スクリバ先生の外科手術の大部分は此處で行はれた、手術室と云つては板敷の頗る粗末のものに過ぎぬ、夫でも上から光線だけは採れる様になつて居つたが、雨天の日は此硝子張りの採光窓から盛んに雨漏りがするので窓の上に簾を被せて之を防いだものだ(河本重次郎君實話)、當時の院長は華岡眞節で屢々手術室の改築を逼つたが豫算の都合上中々行はれなかつたのである、其手術室の中央には水造長方形の手術臺があつて其上に疊を置き更に桐油を敷て、患者は著衣の儘其上に横かされて手術部を露出し他は油紙で包れるのである頭上には昇永水の入つた大きな瓶が二つ吊されてあつた、手術室の消毒は主に石炭酸「スアレ」で稀に硫黃の燻蒸をやつた、スクリバ先生は洋服の上衣を脱ぎ捨て「シャツ」の袖を高く掀起、腰の邊には力士の著ける化粧廻の様な眞田紐のついた前垂様のものを「チョッキ」の上から括りつけて居られる、助手は白い前垂掛に似た丁度神葬式の白丁の著て居る様ふものを身につけ

て勵た(當時の學生間に外科助手を渾名して神葬祭の旗持と笑ふたり)、固より殺菌水は愚い水道もない時で室外の「タンク」貯られた井水を導いて何でも使つた、又室内に小さな風呂桶があつて湯が沸してある、手術前には勿論手を洗ひ清たが石鹼と刷毛を用ゐたとは矢張り今日と同様である、出血を拭ふのは凡て海綿で大小種々の海綿を海綿鉢に挟んで交る／＼使ふのであるから、三人許りの看護婦は五升程入つて居る石炭酸水の甕を圍んで血に汚れた海綿洗ひに忙しかつたものだ器械類は凡て二十倍石炭酸水に漬けて消毒した、絹絲を用ゐたのは河本(重次郎)君の説によるミスクリバ先生だそうでシュルツェ先生の時迄は一切腸線であつたさうだ、之はスクリバ先生の一大功績と云つて宜い、又先生は兩刃性の外科的鑿よりも日本の大工の用ふるものの方が遙に工合がよいと云つて常に夫れを使はれた、自分も今日外科の鑿を特に大工の鑿の様に作らせて用ゐて居るが確に工合が良い、把針器は悉くジモン式のものであつた、偕其手術後局部は更に昇永水で洗つて凡て排膿管を入れて繃帶を施したものだ、「ガーゼ」の如きも脱脂「ガーゼ」は高價で頗る貴重のものでされて開腹術以外には餘り用ゐなかつた、凡て生「ガーゼ」で済ました、「サリチール」酸綿は随分多く使つた、助手は其刺戟で鼻を衝れて弱らせられた、患者の運搬は凡て擔架であつたが自分の助手時代明治廿三年頃に當時の器械係の大西老人(秀春)に相談して車輪の付たものに改良した、其後大西老人が赤十字病院に轉じて其處でも用ゐられたさうであるが兎に角運搬車は全く自分の發意と思ふ、勿論順天堂病院の如き大病院では其以前用ゐられて居つたか何うかは知らぬ(瀬尾原始、醫事新聞第二九二號、醫科大學第一醫院防腐法概要、明治廿二年刊行)。

病室での繃帶交換は等しく凡て「スプレー」の下でやつた、其頃は廻診毎に一病室から大きな金盥に山の如く血や膿に汚れた繃帶材料が出たものである、以て當時如何に創傷が多く化膿しつゝあつたかを察せられる。

(漫録)

●開腹術 ●開腹術だけは今の病理學教室の後方にあつた上等病室の一を割いて其手術室に充て他の手術と別けてあつた、前夜から石炭酸「スプレー」で室の消毒をした、手術の時はスクリバ先生を始め助手は勿論、參觀の學生まで凡て入浴し一同白衣を著けた、又先生の命(?)とあつて眼鏡も石炭酸水に漬けて頭髪までそれで拭つた、今から考へると手術其ものにも随分無駄と思ふとをやつた様である、開腹術の中で一番多かつたのは卵巣囊腫の手術であつた、其頃婦人科は清水(郁太郎)教授の死後で講義はベルツ先生の擔任であつた、併しスクリバ先生の開腹術の成績は不幸にして佳良であつた而して其良くないと云ふのは全く傳染病室が接近して居る爲めであらうと云ふ説をふした人があつてスクリバ先生の爲めに同病室を他に移轉すべく當時の學生三浦(謹之助)君などは、熱心に此説を主張されて屢々學生會議を開いたものだ。

スクリバ先生の半身 スクリバ先生は時に随分無理な手術もされたが確に上手であつた、先生は元とウエルツアルヒ大學の出身でハイデルベルヒで「ドクトル」試験に應じ其の後フライブルヒで腎臓摘出を以て有名で「モモン氏に師事され、又脊椎「カリエス」の治療を以て知られたマース氏にも贊を執られた、それで先生も日本に聘せられて間もなく明治十七年の頃に覺ゆるが既に外腸性腎臓出血に其摘出を試み、又馬の毛を詰めた枕を盛んに用ゐて脊椎「カリエス」を治療された、餘談は措いてスクリバ先生の手術は確かに所謂妙手であつた、器械係の大西老人がよく云つたことがある、前のシュルツェ先生は器械が喧かましくて凡て摘はなければ中々手を下されなかつたが、スクリバ先生に至つては頗る無難作で器械係は樂である確かに上手の先生だ云つて居た、現にある手術の時骨膜剥子が見當らぬので方々探して持て來た時には既に先生は鉗子の一方で用を終つて居た、乳癌の如きも先生は一刀の下に其一侧を大胸筋まで切り第二面の刀で他側を截り去つた、それから大海綿で押へて出血を止めて置いてポツ／＼血管を結

禁された、出血は手術を早くさいすれば決して恐るゝに足らぬとは常に先生が學生に教へられた言である、其頃の自分達は夫に之を眞似て固々失策をやつたものである、佐藤教授が一方に止血して一方に刀を進めらるゝ用意周倒の態度とは正反對に違つて居た、謂ゆる快刀亂麻を斷つゝの趣があつた、頸部の再發轉移瘤なども何等の顧慮なく平然として刀を下された、かく先生の運刀は頗る快速であるが學生に見せる時間は可なり長かつた、それが亦先生の得意な所であつた、開腹術にしても腹腔を開いた儘で詳く講義を續けられた以て先生が如何に學生の黨陶に熱心であつたかを察すべく、先生の有徳を發揮した一端と見られる、若し一向に自己の手術成績のみに顧慮してロク／＼學生にも見せず講義もしまいと云ふならば、それは私立病院であすべき事である要するに先生の手術は刀の運びは早いが講義の爲めに比較的多くの時間を費したことは或は先生の開腹術の成績をして前に云つた如く不長ならしめた一原因ではあつたかと今思ひ當るのである、現に清水教授の成績にしても、東京病院の高木男の成績にしても當時決して悪いことはあつたのである、此清水教授と云ふのは明治十一年の大學卒業で、明治十四五年の頃婦人科學研究として官費留學を命ぜられた最初の人である、同教授の歸來始めて我が大學に婦人科の獨立を見た、手術も達者であつたが惜いことに肺患で早く世を去られた、自宅治療で初診患者から診察料を徴收すると云ふことは此人が始めて行つたのである、何所か變つた人であつたと思はれる、又福岡の大森、池田の二君は明治二十三年の頃既に開腹術の一百例を記して其成績の良いことを云つて居られたのである、二君は又十七、八年の頃國帝切開術をも試みて其結果を収められた、又濱田教授が明治二十二年頃に行はれた開腹術の成績も決して悪いとは聞かへかつたのである、序に當時の濱田教授式開腹術の模様が委しく其頃の『醫事新聞』に出て居るが、患者には手術の數日前から鹽類下劑を與へて腸管を疏通し、猶二三回の灌腸を反覆し、手術室には前夜から石炭酸

「スプレー」を施したとある（眞崎又吉、醫事新聞第三〇四號、明治廿二年參考）。

防腐外科の輸入 本邦に防腐外科を輸入した大功勞者は公正に云つて實に福岡の大森、池田の二君である、二君は其種子を輸入し培養し更に一般に普及せしめた外科の恩人である、蓋本邦外科の進歩に於て其功獨逸國に於けるリストアの學說を正當に理解し之を實際に應用した彼のフォルクマンに比して勝ることも決して劣ることはいないのである、其一人たる池田君は有名なる獨逸語の達人で學生時代から既に眼を斯學の新刊書に注いで新智識の吸収に努め却て日本の文字は讀むにも書くにも困られたと云ふ話のある程の人である、想ふに學問熱心ある大森君の智慧袋は專門こそ異れ池田君であつて兩雄相俟て茲に今日の福岡學派の濫觴をふしたものであらうと思ふ、勿論故人とせられた橋本子爵若くは佐藤男爵の本邦外科學の發達に於ける功績に至つては之をランゲンベックに比しストローマイエルに擬するも何人も異議のないものと思ふ、橋本子爵は明治八、九年の頃既に手を上顎切除術に著け、又佐藤男爵は同八年の頃指を卵巢の手術に染められた、併し當時の開腹術は手術後「ドレーン」を腹腔に通じ消毒藥液で洗つたこと云ふのであるから豫後の良くなかつたのも無理はない（順天堂醫事雜誌卷一、明治八年發行參考、内に二十年前笠翁佐倉にて卵巢囊腫を其轉歸を以て手術を施したりとあり笠翁とは尙中の號あり）、翻つて我が大學に防腐外科を輸入されたのは佐藤教授であつたか或は宇野教授であつたか今確然たることを云ひ得ぬが、佐藤教授の歸朝は明治二十二年であるから獨逸にも未だ其萌芽を見たに過ぎぬ時である（佐藤教授がベルグマンに従遊したる當時はシンメルプツシュに未だ出て來らざりしと云ふ）、宇野教授が「ツベルクリン」の研究として渡歐された明治二十四年の頃は最も其盛な時代で、現に同教授が彼地でシンメルプツシュの消毒釜を購求して大學に送られ、其當時自分達は何かの事の紀念として釀金して此消毒釜を買つたことにして

自分達の名義で大學に寄附した事實の記憶があるから、多分宇野教授が防腐外科(消毒釜)輸入の功績を擔はるべき人であらうと思ふ、兎も角も二教授共に今日猶ほ世に生存せられて若し此自分の推測に間違があるならば何時でも正誤を申込み得らるゝ人であるから、自分は茲に憚らず所信を公言するのである。

治療法の變遷 眼を轉じて治療法の變遷を見るに僅に二十餘年間の出來事ではあるが随分變つたことが多い、恰も外科各論を書く積りで系統を逐ふて細かく調べて行つたら面白いらうと思ふが、茲には今想ひ起した一二の例を述ぶるに止めて置かう、第一には植皮術である、スクリパ先生は屢々チールシュ氏式を試みて而かも好果を收め得られなかつたのであるが佐藤教授に至つては遂に成功された、併し其方式は今日に比すれば頗る面倒臭い煩瑣の者であつた、即ち手術後十二時間位は皮膚の剥れぬ爲めに絶えず食鹽水を繃帶の上から滴下して夫れを濡らして置いた、自分も當直の夜ふど看護婦が果して命令通り正當に遵つて居るか何うかを監視すべく度々病室に足を運んだものである(田代義徳、醫事新聞第二九四號參考明治二十二年刊行)、夫れから股關節の結核であるが、これは全部牽引繃帶であつた、當年の外科病室には幾人さふく此牽引繃帶を施された、患者が永い時間の間入院して居つて、卒業試問などは何時もこれで苦められたものであるが、今日では何れの外科病室へ行つても牽引繃帶などは多く用ゐられて居らぬ、次に化膿性疾患は凡て切開してから腔内に格魯兒亞鉛を浸した海綿で腐蝕し又多く銳匙で搔爬した、この搔爬は凡ての膿竈に行はれて殆ど缺く可らざるものとさつて居つた、それが又患者には頗る苦痛なので往々悲鳴をあげたものだ、當時助手であつた某君の如きは横痃の切開後此搔爬で股動脈を破つて大出血を致さしめ狼狽を極めたこともあつた、今日では若し新しい人が適應も考へずに搔爬を行らうとすれば自分は手を舉げて止めるのである、炎症のある周圍には必ず小圓形細胞の滲潤で堤を築いて

居るのであるから此自然的の防備を破壊してはならぬと云ふて聞かすのである、終りに今日の如く凡ての創傷に對し殆ど之を洗はふかつたのは唯かに記憶せぬが何でも日清戦役後の明治二十八、九年頃からのことと思ふ、それまでは必ず洗ふものに極まつて居つたから、洗はぬ方針に更へた當座は問ふ患者から不平を訴へられた、何故洗て呉れぬ、勞を惜むのかそれとも費用を節すのかと詰問された事も二度や三度で無かつた、丁度一昨年頃からグロツシヒの沃度で消毒法が行はれろく、創傷を清潔にもといて終るは不都合であると患者から詰問されたこと近頃西洋の新聞にあつた記事と同一轍の有様であつた。

患者の變遷 自分は其後一旦大學を出て私立病院に従事し明治三十七年再び赤門を潜る身さふつたが、以前助手であつた時代とは患者の種類がガラリと變つた、昔は耳漏、淋病、脛骨「カリエス」、乳癌などと云ふ患者が外科の大部分であつたが、今日は這種のものは殆ど大學を訪はぬ、これは一面幾多の分科の獨立したのと他面には地方の醫學の進んだ結果である、今日大學の外科で取扱ふ大多數の患者は腹部外科に屬する面倒のもの許りと云つた。

専門分科の餘弊 終りに自分は現下本邦醫學に於ける缺陷と思ふものを開陳し、猶ほ平素抱懷する希望の一端を述べて此壇を降らうと思ふ、第一には専門分科の餘弊である、某患者魚骨を咽喉に刺し外科醫に走り耳鼻咽喉科の先生に赴き又消化器専門の大家を叩きて奔走甚だ努めたる笑話あり、或人警句を吐て曰く、

魚の骨専門の境にプラ下がり

然れば今日の様に餘りに細かく醫學が枝裂分葉して行くこと云ふことは果して何うであらうか近頃維也納のローレンツと云ふ人の説を雜誌で見た、曰く外科學の領域から先づ皮膚科は獨立し次で黴毒科、泌尿器科亦た分離し、耳鼻咽喉科も一分科となり、最近には矯正外科も樹立されて四肢を奪ひ去

つた、餘す所は唯だ内臓のみであるから今日では最早や外科醫と云ふ大なる名稱は用ふる必要がない、イヤ用ふべき權能がない、宜しく内臓醫と唱ふるが至當である云ふのである、稍々極端ではあるが亦た半面の眞理を含んだ味ふべき言である、勿論之に反對して假令乳嘴突起切開術でも腎臓の摘出術でも將亦た骨關節の手術でもよく之れを爲し能ふ吾人は外科醫の名を蹈襲して決して不當でない云つて居る人もある、兎に角斯く多くの分科が樹立して、内科の方でも神經科は既に早く分離し消化器病科新たに起り、血行器病科亦た漸く獨立せんとするが如き趨向のほの見ゆるは、果して學術の進歩として慶すべきものであらうか、將亦た患者其の者は之によりて甚しき不便を感ずることがないであらうか、獨逸大學の如きも斯く學科の多くあつた爲めに從來の六年の課程では授業の時間が不足である云ふ、今後學生が三十にして初めて校門を離れ、十年許りも世間に働らゝと共に直ちに老境に入る云ふことは、國家經濟の上から見て損失ではあるまいか、吾人は須らく大に熟慮せねばならぬ秋である、自分は丁度昨年商人が餘り分業に過た結果として今日の三越あるが如く、遂に醫者の「デパートメントストア」の起る機の必ず絶無である事を保し難いと思ふのである、明治十九年のときであるがベルヒマンが萬有學會で演説した其筆記を當時渡歐中であつた片山博士が醫事新聞社に寄せられ、それを自ら翻譯して同誌に掲げたものがあるベルヒマンは内外科學の關係を論じて内科は樹木の幹に比すべき外科は蓋し其枝葉である根幹を離れた専門分科は決して成立たぬと言つて居る、かう云ふと内科は一番偉い様であるが其意味ではない、畢竟内科は實地醫家の普通智識である、此智識の上に築かれた専門てかくてはいけぬ、外科にしても、婦人科にしても、眼科にしても、苟も専門分科たるもの凡て内科十専門分科てかくてはならぬ、それは自分が屢々學生に繰返すことである。

さてある、これは西洋の書物には決して見ない奇現象である、英、獨、佛其何れの著書を見ても自國人の名前は並べてあるが他國人のことは餘り書かぬ様にしてある、爾うならなくては決して學問が獨立したとは云はれぬ、日本の著作には日本人の名前が多く擧げられてある可き筈の者である、今日獨逸醫學の名聲は旭日瞳々たるものであるが、外科の如きは元は云へば佛蘭西に學んだものだ現にコツヘルにしても壯年の頃は巴里に遊學して其技を磨いたものである、それが今日獨逸の外科學界では多くさもデルベヒ、リスフランクの大家迄は之を口にするが其以下の佛蘭西學者のことに至つては最早や何さとも云はず又書きもしない、自分は良く學生に云ふて聞かせることであるが、何も覺に難い外國人の名前を無理に記憶する必要はない、其事は日本で誰が始めに行つた、此手術は誰が始めて試みた云ふ様に記憶すればそれで澤山である、此方が記憶にも樂であるし學會ぶどで其を見ればアノ人だぞ記憶を喚起して洵に都合がよい。

飛び／＼の研究 日本は學者の研究は其仕方が何うも飛び／＼でいけぬ、途切れ／＼で困る、何か一ツ新らしいことが起つた云ふと直ぐ夫れに走るが又直きに捨て仕舞ふ、丁度赤兒が變つた玩具に轉々移つて行くことである、これは畢竟するに自家に牢として抜くべからざる底の信念の無い結果である、若し始めから順序を立て秩序を逐て研究を重ね、一步一步経験を積んで此學理は斯うなければならぬ、此病氣は斯うすれば治るものであると自分に堅く信ずる所があるならば假令新らしい學說が生れ斬新ある治療法が公にされた所で遽々として動くことはいかぬ筈である、何うも今日の日本醫學は土臺石から築いて懸つたのでないから少しの地震にも動搖を免がれぬのは遺憾である、土臺には構はないで柱丈け他所から持て來て太くしよう云ふのだから困る、云ふて決して飽くまで舊態を墨守し因循であれ云ふ意味ではない、絶えず意を斯學の進歩に注ぎ、探て以て用ひべきあらば能く之を咀嚼し消化して行かねばならぬが入智慧はいけぬ、鵜

日本の醫學雜誌 現下日本の醫學に獨逸の學風が充漲して居るから無理もないが、どの雜誌を手にとつて見ても凡て獨逸の記事で埋つて居る、それが又一ツ吾人の考ふべき問題であると思ふ、自分は少くも英、米、佛に於ける學潮の一斑は同時に日本に傳へたいと思ふ、それでなくては公平でない、溯つて明治十七、八年頃の『醫事新聞』でも『東京醫事新誌』でも今開いて見ると英に關する記事が殆ど全幅を占めて居る、後に起つた『中外醫事新報』こそは創刊の當初から獨逸醫學の普及に努め、其紹介を趣旨と爲して立つたのであるが、夫れが丁度自分の大學を卒業する頃から獨逸醫學の勃興に連れて『醫事新聞』でも『東京醫事新誌』でも一様に材料を獨逸に採るに至つた、強ち獨逸の學風を彼れは云ふのではないが、一面には如上他國の思潮に觸れ其論調をも聽いて置く必要があると思ふ、例へて云へば彼の六〇六號でも獨逸の雜誌のみを見て居るさ凡てが之を謳歌し滿紙賞讃の聲に充たぬは無いが、翻つて獨逸以外の他國の記事を読むと多少懸念を起すべき様のことゝ報告されて居る、中には反對せんが爲めに反對して居るかとと思ふ様なものもあるが、最も始めに六〇六號に對して批難を加へたのは堤國ブラーグ大學の人であつて、其爲めに膀胱麻痺が起つた夫から再發するところもあると云ふことを云つた、又維也納のフインデルは水銀注射の効果と敢て軒輊がよいと唱へて居る、又佛蘭西ではこれは多少故意であるかと思はれるが、徹毒の一専門家家は「ヘクチン」と云ふ一種の砒素劑の方が反て六〇六號よりも優つて居ると報じて居る、兎も角も吾人は是等反對の聲にも傾耳して濫りに雷同附和する事を避け冷靜に取捨して行かねばならぬ、幾十年以來幾千萬人に用ゐつた沃度劑水銀劑の効力は何人とも雖も否定することは出来ぬ今日六〇六號が製出されたこと云つて一朝一夕に全く棄てることは出来ぬ、先づ十分利害得失なり適否なりを究究せねばならぬ、之には日本の醫學雜誌あるものが從來の獨逸醫學の外に猶ほ英、米、佛の風潮にも注

畏友岡田乾兄君、余ノ講演翌日一書ヲ寄セラレ、又翌日更ニ一信ヲ贈ラレ、第二醫院外科部ノ狀況ヲ語ラル、コト詳細、恰モ其當時ヲ見ルガ如シ、外科部回診ノ際ニ於ケル提箱又ハ「イリガートル」ノ如キハ余亦第一醫院ニ於テ親シク目撃シタル所ナリ、僅ニ是レ四分ノ一、百年ノ昔ニ過ギザルナリ、而シテ其變遷ノ甚大ナル眞ニ桑滄ノ感ナキ能ハズ余獨リ岡田君ノ述懷談ヲ底底ニ私スルニ忍ビズ、故ニ岡田君ノ認許ヲ得テ余ノ講演ノ追加トシテ茲ニ掲載スルコト、ナシズ、夫レ岡田君ノ叙事タルヤ一々目撃實賤ニ出ルヲ以テ、筆ヲ活動シテ余ノ散漫ナル講演ノ比ニアラズ、橋本子爵ノ熱烈ナル氣性、佐藤男爵ノ寛容ナル態度、措辭數字ニ過ギザルモ尙ホ宛然當時ニ於ケル其風姿ヲ思ハシム快ナル哉

岡田乾兒

其

謹呈仕候然ば本日先生の御演説には不識自我を忘る所謂二味に入りて敬聽する者は須く先づ内科的智識を以て基礎と爲し其上に建設せる専門にあらずれば缺陷なきを保し難として現下専門の枝葉にのみ走りたる趨勢を諷せ

られたる事實に敬服の外無之候そは何故さふれば老生にもデコボコ相當の理想あり希望もあり只先生の如く具體的ならず周到ならず緻密あらざるのみ其軌全く一ふり軌の一ふる頭腦を以て先生の演説を傾聽し争てか自我を忘せざるを得んや、さりとて老生の思考は散漫にして低劣ふりこれ自己の識低く智淺き故ふり今後徐ろに御教示を仰がんと欲して已まざる所に御座候

先生は御卒業後二十五年のたまへり老生は茲年五十四歲明治十五年十一月中卒業試験を了し十六年一月授與式二月第二醫院當直醫補助を拜し十七年末外科に轉じ十九年に至り御拂ひ箱と相成申候實に千古の古物に御座候過刻先生の御演説中に生「ガーゼ」は出たが綿撒絲に石炭酸「オレーフ」油を注ぎ黄色に染りたるものふりき容器は黒墨の箱にて裏面に「アリキ」を張れるものふり創面を洗ふに鉛糖液を用ゐたりそれこれする内に「ガーゼ」が生れたる先生過の刻仰せられし生「ガーゼ」ふり綿は「サルチル」綿の「クシヨン」ふり併し不思議に「ゴム」紙を用ゐ未だ亞麻仁紙の如き經濟的輕便のものふかりき其内に沃度「ホルム」出て其儘匙頭にて創面に撒布す難波君(二)は之を「キナコ」通稱し居れり其内に亞麻仁紙が生れたる(ア)一つ忘れまし此前にリステル綿帶の行はれたる時分には高野先生おどは嚴重にやられた殊に石炭酸「ガーゼ」さて茶褐色の「ガーゼ」が出来た石炭酸に滲青やら「リチチ」油やら交つたもので隨分手数の掛つたものがあつたそれから昇永を用うることが始つて先づ縫合絲を昇永水にて煮沸し後「カルボール」水中に投げて蓄へました爲めに此頃より後絲孔の化膿が殆んど止むだ時に面白き事があります十七年末より十八年に延いてのこと、記憶して居りますが佐藤進先生が大學醫學部講師を囑託されたこれは橋本先生が第二回洋行の不在中吾等別課生を教ふる爲めであつた其時老生は既に外科にありて先生の指揮を受けた先生は未だ「ガーゼ」を知らぬ沃度「ホルム」を知らぬ縫合絲の消毒法を知らぬ手術に際し大喝綿撒絲を呼ぶ石炭酸「スプ

レー」を呼ぶ此時第二醫院には既に此二者は跡を滅し居りしにより吾等助手以下小使に至る迄狼狽甚し只仰頭拜謝して曰く寢に綿撒絲は「ガーゼ」に化し「カルボール」スプレー」亦亡し先生願くは恕せよ先生ふかり許さず止むべく器械棚の一隅より百年前陳舊の綿撒絲少許を探出して僅に罪を免れたり其後徐ろに「ガーゼ」沃度「ホルム」の功能を小西(功)、難波等の老先輩より佐藤先生に語り先生漸く諸せらる併し未だ絲の消毒法を知らず故に講義の際生徒に向て絲孔の化膿を喋々教示せらる助手竊に嗤ふ先生は儼然として説く是亦後日に至り徐ろに老先輩より告げ先生亦大に之を是とせらるゝに至りしことあり加之先生出勤の歸途第二醫院にて「ガーゼ」の拂ひ下げを持ち歸られたる等今思へば實に噴飯に堪へることに候此頃に候が順天堂に造鼻術等珍らしき手術あるときは第二醫院の助手等にも傍觀に來よと許さる生等欣んで行く手術場は四坪ばかり土間に三方に欄檻あり生徒これに上りて傍觀す中央に木製の粗野なる机あり手術臺ふり上に薄つべらる布團を設け其上に患者を載す一隅に水瓶あり井水を盛る枕頭二箇の鐵葉製金盥あり石炭酸水を容る中に「メス」類鉗子類あり一の金盥には縫合絲針把針具等を置く血は海綿にて拭くこれ亦た金盥に投込む爲に「カルボール」水は半は血液ふり(第二醫院にては此頃には血拭に木綿を用ゐ居れり但し柄附は海綿ふりし)今日の順天堂は輪奐の美を極むるも其前代は如斯に御座候小生は十九年三月御拂箱に相成候故其後の事は知らず且つ第一醫院の事は更に知るに由ふきも例の大西(秀春)の談話に「今度來たスクリバ」云ふ外科の教師はぬらいものだ實に快腕だ殊に器械に構はぬ絲は絹絲が上乘だ縫線や腸線などが要るものと云つて居る云々」此等より推考するも過刻安西君(清輔)の御話だと云ふ絹絲を多く稱せしはスクリバ先生ふらむも愚生も信じ申候又防腐外科は宇野先生が創始云々の事も大西の饒舌にて知れり曰く「宇野さんは八釜しぞスツカリ今日の獨逸流を見て來た創は決して洗はぬ消毒に藥を使はぬ器械は惡く煮る其他總て煮沸消毒熱氣消

毒だ沃度「ホルムガーゼ」の一端等が一寸机に觸れても直ぐに剪除するのだが手拭などは一度一度に棄てるのだ實にむづかしいものよ」おど申し聞かせり是亦先生の過刻の御演説に一致する様に被察候一寸申し遣しました私が第二醫院に居る時分にも沃度「ホルムガーゼ」を多く殊にゴテム多量にあてました其製法が面白い「グラス」板の上に不殺菌の單「ガーゼ」を延べて不殺菌の沃度「ホルム」を手掌で摩り込んだのでありました云はゞ黴菌の凝塊を此上もふく信じて使用して居つたのであります云々。

其二

再啓本日は態々御返書を辱ふし難有奉感謝候紀念として御書狀は永久に蓄へ置可申候擬御言葉に甘へ調子づき候儀には決して無之候得共滑稽ある昔の事實續々念頭に湧出し來り候まゝ只だ記憶の儘を記し座右に呈候可然御取捨願上候昨日は餘り取急ぎ申遣し候一二ヶ條有之小生は兼て申上候通り明治十六年春より十九年春迄第二醫院にあり此時の文相森有禮氏快刀を以て亂麻を斷ち官吏利員淘汰を勵行せられ此頃川柳あり

モリ／＼ト幽禮人チカミコシ

遂に東京大學醫學部を廢し醫科大學を設けられたるは申上候迄も無之小生等は陳笠ながら大學醫學部と死を同ふしたる者に御座候『自今出勤ニ及バズ候事』なる辭令書今尙存す此の辭令連申にて自今會なる會を催し候こゝ有之候小生の申上候事は専ら在職中の見聞と御承知被下度奉願上候本日申上候事は當事の看護婦の狀態と大學醫院特殊の「イリリガートル」に御座候「イリリガートル」は「フラスコ」の底部を切り瓶口には「キルク」を挿し其中中央に硝子管を挿込みこれに護謨管を接したるものに御座候右は醫科大學醫院に相成候後も多少の年限中使用被致候様記憶致居候最も奇態ありしは看護婦の服裝並に結髪（髪）の科柄に候今日の如く白衣觀音は一人も無之縞木綿の半纏にて多くは筒袖のものを着用紺足袋を穿ち居れり髮形は丸髻最も多く銀杏返し櫛巻き其他結び髪先づ無制裁あり然し島田髻は極めて甚だ非常に

稀にして一二回若き看護婦が一寸道樂にやつて見たが同僚の忠告にて決然やめた様も記憶も御座候勿論一定の修養なく單に熟練にてやる稀にはるか／＼老練家もありて新助手は内々くすぐられた事も不尠候外科に阿安さん云へる老練家あり氣も利く腕力もある阿安さんの帛帶帶ふどは／＼解けぬ緩まぬ殊に外觀も美であつた難波君等の股肱であつた内科に宮田鶴あり是亦老練あり多少の容色を具ふ丸髻半纏を常装とす内科故餘り腕力の有無は分らぬ十九年の自今辭令後櫻井先生が此婦を産婆に仕立てられ成業して後／＼成功して立派な一門戸を張れり五六年前腎石に罹り近藤先生の手術を受けたるも不幸にして斃れたり其他の看護婦は今日の如く素養なき故屢々可笑しき事あり例へば鑷子を呼ぶにキンセツト或はピンセツト云ひ動脈を臍脈云ふが如し夜間患者に後出血ありし時猖獗して醫局に走り來り先生何番室の患者が臍脈がしまして大變て御座います臍脈が斯んかに／＼と云ふて兩手を以て其量を示す等決して法螺に無之候右様の次第にて看護婦の行動統一を缺きしは勿論なれども只だ眞摯にして愛すべき所も有之候ひき又面白き話柄あり外科部に一患者より木屋善吉云ふ童子あり橋本先生の治を受く膀胱結石あり高截開を行ひ結石を摘出せらる（手術は生等助手拜命の前にてありし）先生頗る道樂ものなり先生云く二年入院させて置けば石が出来るか何うか試みたして其母タケ共にと永々と入院を許し居れりタケ極めて朴訥れども何の故か書を能くし多少和歌のたしかみありき然るに橋本先生二度目の洋行さきた其後患者は全く病院に用ふきものにまつた一日母子に退去を命ぜり母あるタケ曰く謹て命を奉す多年の間御高恩を蒙り善吉は全然無事の人と成れり御恩は死すとも忘れず今日退院の命を受け速に退かんとするも如何せん家もなければ親戚の頼るべきものもなし嗚呼如何せば可からむと嘔啼流涕す茲に至り助手連困つた／＼そこで評議を凝したが小西難波等の連中亦大に閉口せり其結果仕方がないから母タケは看護婦に使つてやるべし小僧は何れへか依頼すべしと云

ふ事に成つて時の第二醫院管理三浦義純先生に頼つた先生何事も反對せられしことあしうれや諸君の好いやうにするが宜からうと云ふ事に成つたそこで善吉は彼の大西の工場に小僧として傭ひ母タケは第二醫院外科室の看護人となり小生の同院を去る時分には取締に成りました此等の事は實に三文の價もふき話ながら如何に當時の高般寛大にして自由ふりしかを推想するに足るものと存候

病室回診の時には小使必ず隨行し回診篋を携ふ長方形なる木篋の黒塗のものにて手柄を具ふ内に藥品數種の瓶を容る絆創膏剪等はヒキダシに在り内科共に此篋は同形ありしも外科は器械其他材料多き故に二箇携へたりと記憶致居候「アリキ」製金盞土鍋等も必ず附物ありき「フラスコ、イルリガートル」は數箇病室に備へ附けたりと覺ゆ

當時消毒法は勿論完全ならざる代りに手術は滅法八釜しい橋本先生の「アンプタチオン」を行はるゝ手附などは恰も濱口熊岳が眞言祕密の印を結ぶが如き有様にて其勢當るべからざるものがあつた縫合等も極めて緻密に奇麗に處し脈管結紮などもおかく六かい血管のみを隔離して行ふにあらざれば許さず大きく握むと御目玉を頂く宇野先生の如きは尤も八釜しかつた吾等は挟みしものを必ず一二度ゆすぶつて見てやり直はす云ふ實況にて實の處は吾等は少々癪に障つて感情を害せしことありしもわかし櫻井先生は婦人科主任ふりしも患者は一般病室に容るる故に専ら内科にてジャアと洗滌を行ひました未だ内膜の「アウストラツツング」はあかつた十八年半ば乃至末比に至り始めて慢性子宮出血に對して行つたと覺はて居ります眼科は幽微ながら獨立の姿でありました

小生等が退きし後漸次今日の姿に向し看護人も束髪白衣の「ウニホルム」に何時さなく成つた其頃の事務員野中保太郎君今尚ほ在職偶々逢へば今昔の感に堪へません實の處小生は月給十五圓の助手時代ほど快調にして無邪氣に面白い事ばかりませぬ黒岩徳明(今の赤十字病院外科部長)君は尤も親

友で馬鹿の明かし合ひを致した仲間であります 以上 (刀圭新報抄)

抄 録

●有尾類聽器ノ形態學補遺

(第三回日本醫學會解剖學部) 岡 島 敬 治

有尾類ノ聽神經孔ノ數及其狀態並ニ聽神經ノ分枝ニ就テ六種二十四個ノ聽器ノ連續標本ヲ檢シ、次ノ結果ヲ得タリ

一、有尾類耳囊ノ内壁ニ位スル聽神經孔ハ、從來一般ニ考ヘラレタル如ク純ナラズ、多クノ學者ノ唱フル如ク二個ノモノナク、必ズ三個以上アリ

二、尙四個、時トシテソレ以上ノモノナリ

三、聽神經孔ノ數ノ不定ナルハ、主トシテ中聽孔ノ狀態ニ基因ス

四、聽神經ハ從テ耳囊ニ入ル際三個以上ノ大小不同ノ枝ニ別ル

五、中聽孔ヲ通ズルモノハ、凡テノ場合ニ於テ正圓囊ニ至ルモノニシテ、

中聽孔ノ數増加セバ、此枝ノ數モ從テ増加ス

六、正圓囊ハ又屢々後枝ガ後聽孔ヲ通ジテ耳腔内ニ入りタル後、ソレヨリ

枝別ヲ受ク

七、後聽孔ハ又時トシテ地平ニ位スル軟骨板ニヨリ、上下二劃ニ區分セラレ、コトアリ、カ、ル場合ニハ上劃ヲ後枝ノ上枝(パルス、チグレクタ)及び後壺腹ニ至ル、下劃ヲ其下枝(パルス、バジラーリス)及び「ラゲナ」ニ至

ル)が通ズ

●「オニヒヨダクチルス」ノ
水晶體ニ就テ

(全上)

岡島敬治

「オニヒヨダクチルス」(箱根深山魚)ノ水晶體ハ、他動物ノモノト異リ、前後面ニヨリ縫線ノ狀態ヲ異ニス即チ前面ニハ鉛直線狀ノ縫線アルモ、後面ニハ縫線ナク、唯點アルノミ、コレニヨリテ水晶體纖維ハ二種ノ特異性ヲ現ハス、即チ纖維ノ長サハ前縫線ノ異リタル部ヨリ起ルニ從ヒ差異アリ、縫線ノ中部ヨリ起ルモノハ最も長ク、兩端ニ近ク起ルモノハ短シ、又纖維ノ前後兩端ニ於ケル幅員ハ以上ノ狀態ニ因リ著シキ差異アリ、即チ前面ニテハ、長キ線ヨリ起ルヲ以テ幅員廣ク、後面ニテハ唯一點ニ集ルヲ以テ極メテ狭シ

●自家考案ノ注射器ニ就テ

(全上)

石川喜直

防腐注射ニ用ユル稀薄ナル液體ニ於テハ「イリリガートル」ヲ使用シテ以來不便ナル唧筒注射器ハ殆ド使用スル場合ナシト雖モ動脈注射ニ於テハ未ダ全ク之ヲ廢スルノ運ニ至ラズ、而シテ普通行ハル、處ノ唧筒注射器ハ動脈注射(タイヒマン氏注入料濃粉注入料等)ヲ行フニ當リ、活栓ニ加フル壓ノ不平均、脈管壁ノ破壞空氣ノ竄入等不便ヲ感ズルコト枚舉ニ暇アラズ予ハ之等ノ不便ヲ除カンガ爲メ、諸種ノ注射器及ビ吸引器等ヲ參酌シテ一種ノ注射器ヲ製セシメ、三十八年以來使用シ、從來ノ注射器ニ於ケル諸種

(抄錄)

ノ不便ヲ感ゼザルヲ得タリ、其構造及ビ效力ノ要點ハ

第一、活栓ノ軸ニ螺旋ヲ刻ミ、之ヲ廻旋シテ活栓ヲ進退スルガ故ニ強力ヲ要セズ、且ツ注射料ニ加フル壓ヲ平等ナラシム

第二、筒嘴ニ漏斗ヲ附シ、之ヨリ注入料ヲ唧筒ニ吸引ス、故ニ唧筒ト先管トナ分離スルコトナク、注入料ヲ無限ニ追加シ得、其際空氣ヲ竄入セシムルコトナシ

第三、筒嘴ニ丁字形ノ栓管ヲ具備シ、其廻旋ニヨリテ注入料ヲ吸入スル際ハ筒ト漏斗ト相通ゼシメ、注射ノ際ハ筒ト先管ト相通ゼシムルヲ得

●筋肉附著區印象法ニ就テ

(全上)

石川喜直

千九百七年一月ノ Anatomischer Anzeiger ニ、アテンノ教授 G. Scharrer 氏ハ Pyrographische Methode ナ報告シテ曰ク、解剖書竝ニ解剖圖譜ニ載スル處ノ筋肉ノ骨面ニ附著スル區域ハ多クハ想像的ニシテ信ヲ措クニ足ラズ、試ニ二三書ヲ比較スルトキハ各々差異アルヲ發見スベシ、之レヲ要スルニ其ノ區域ヲ定ムベキ適當ノ方法ナキニ歸セズンバアラズト、然シテ其方法ハ筋肉附著部ノ周圍ニ於テ骨膜ヲ剝離シ、脂肪ヲ除去シ、燒灼器ヲ以テ骨面ヲ燒灼シ、爾後普通ノ方法ヲ以テ晒骨スルトキハ、白色ノ骨面ニ黑色ノ筋肉附著區域ヲ現スベシト、之ヲ Pyrogramm ト名ケタリ

予素ヨリ此前提ト同感ナルモノ、試ニ同法ヲ行ハント企テタリシニ、偶々適當ノ燒灼器ヲ缺キタルヲ以テ、茲ニ一法ヲ案ジ、一體ノ骨ニ就テ試ミタリシニ稍々類似ノ成績ヲ得タリ、然モ前者ニ比シ其技ノ或ハ容易ニ且ツ正確ナルナキニアラズヤノ感アリ、依テ印象法ノ一法トシテ敢テ報告スル所以ナリ、其方法ハ

第一、精細ニ筋肉ヲ出シ、骨面ニ達シ、其附著ノ周圍ハ十分ニ清削シ、脂

(抄録)

肪及骨膜ヲ剝離シ、十分ニ骨面ヲ現シ
第二、醋酸鉛ノ濃溶液ヲ骨面ニ塗布シ、骨質ニ浸潤スルヲ待テ
第三、硫化水素ヲ通ジタル水中ニ浸シ骨面ニ硫化鉛ノ黑色沈澱ノ生スルヲ待テ

第四、洗滌シ、筋腱附著部ヲ剝離シ

第五、保温晒骨槽ニ投シ、普通ノ晒骨法ニ從フ

●自製ノ人體内臟實寫型ニ就テ

(全上)

石川喜直

標本ヨリ石膏ヲ以テ直寫シタル實寫型ハ模型ニ優ルハ論ヲ待タズ(千九百〇七年一月) チュビンゲンノミユルレル氏同所ノ解剖模型製作所ニ於テ死刑屍ノ標本ヨリ製スル石膏實寫型ハ、コルマン氏模型或ハワルダイル、ウイヒサ氏模型ニ優ルモノナリトノ報告ニヨルモ、又(同年四月)エルランゲンノゲルラハ氏ハ同市ノコンラード、ゾルト等ノ販賣スルモノハ、從來ノモノトハ全ク其撰ナ異ニスルモノナリトノ報告ニ見テモ、實寫型ノ如何ニ重要視セラレ、カチ認メラレ得ベシ、予モ豫テ實寫型ノ製作ノ趣味ヲ感ジ既ニ三十六年ノ勸業博覽會ニモ筋肉ノ實寫型ヲ出陳シタルコトアリキ、此實寫型ハ筋肉竝ニ充實シタル内臟ニ於テハ極メテ容易ニ製作シ得ラル、ノミナラズ、肺或ハ腸ノ如キ柔軟薄壁ノ臟器ニ於テモ亦製スルコトヲ得ベシ、茲ニ供覽スル三種ノ寫真ハ自製ノ内臟實寫型ニシテ、甲ハ男體(齡七十六、口腔ノ疾病ニテ死亡)ノ前額斷ニシテ、油繪具ヲ以テ著色ヲ施シタルモノ、乙ハ女體(齡七十七、老衰ニテ死亡)ノ正中斷、丙ハ同側面ナリ
其製作法ハ五%ノ「ホルマリン」溶液ヲ動脈ニ注射シテ固定硬化シ次テ食鹽及ビ雪ヲ以テ凍結セシメテ鋸斷シタル標本ヨリ實寫シタルモノナリ

●カハール氏法ニ就テ一二ノ注意

(全上)

醫學博士 金子治郎

此法ヲ以テ神經原纖維或ハ神經細胞體ノ細纖維網ヲ檢出スルハ多少ノ熟練ヲ要シ、常ニ必ズシモ顯出スルモノニアラズ
然レドモ「ノイラ」全體ヲ檢出スル程度マデニハ何人モ容易ク爲シ得ベシ、而シテ之レヲ「ゴルツ」氏法ニ比シ、左ノ利益アリ

一、其部ノ「ノイラ」全數ヲ著色スルコト

二、周圍神經節ニ能ク浸潤シ、其ノ「ノイラ」全部ヲ著色シ、結締組織血管等ハ殆ンド感染セザルコト

三、「デツキ」ヲ用ヒテ永久ニ變セザルコト

此他此方法ヲ以テ眞皮血管ノ如キ組織内ノ彈力成分ヲ檢出シ得ベク、則チ彈力纖維ハ微細ナル末端ニ至ルマデモ濃黑色トナリテ顯ル

●日本産大鯢魚ノ脊髓被鞘ニ就テ

(全上)

島田吉三郎

兩棲類ノ脊髓被膜ニ就キマシテ、從來其記載ガ様々デアリマス、私ハ研究ノ成績ヲ御話シ致シマスル前ニ、脊髓被膜ノ個體發生上及ビ宗族發生上ニ於ケル學說ヲ略言スル必要ガアリマス

此ノ學說ハ二様ニ概括スルコトガ出來マス、則チ其一ハ初メ脊椎管ト脊髓トノ間ニアル中立的ノ被層ガ先ヅ二分シテ Exomeninx 外被膜ト Endomeninx 内被膜トナリ、後チ此ノ二膜ガ各々二分スルト云フ說デ、此二膜ノ分レル時期ニ就テハ亦學者ノ見解ガ違ヒマスカラ、此ノ說ハ更ニ二ツニ分レルノデアリマス

一方ハ魚類ニ於テハ外被膜ト内被膜ニ分レ、兩棲類ニナルト外被膜ガ骨膜

板ト硬膜トニ分レ、内被膜ハ其儘デアルガ、哺乳類ニナルト内被膜ガ二分シテ蜘蛛膜ト軟膜トナルト云フノデ

モウ一ツハ魚類デハ外被膜ト内被膜トニ分レテ居ルノガ、兩棲類ニナルト内被膜ガ一部分ダケ分レ始メ、哺乳類ニナツテ始メテ内被膜ガ完全ニ分レ、外被膜ハ亦二分スルト云フノデアリマス

其二ハ魚類デハ内骨膜 Endorhachis ト原始被膜 Meninx primitiva ニ分レ、此ノ内骨膜ハ決シテ之レ以上ノ分化ヲ遂グルモノデナク、只原始被膜ノ方ガ種々ニ分レルモノデアツテ、兩棲類ニナルト之レガ硬膜ト續生被膜トナリ、哺乳類ニ於テ續生被膜ガ二分シテ蜘蛛膜ト軟膜トニ分レルト云フ説デアリマス

以上申シ上ゲマシタル通り、兩棲類ノ脊體被膜ニ就キマシテハ次ノ三通リノ記載ガアルノデアリマス

一、骨膜板 硬膜 原始血管膜 Salamandr. Macul. (Schneider, Oveit)

二、外被膜 内被膜一部分分離セントス Menobranchius (Gegenbaur)

三、内椎骨膜 硬膜 續生被膜 Urodelen

ソコデ、私が日本産大鰐魚ノ脊體被膜ヲ研究シマスルニ就キマシテハ第一ニ本動物ノ脊體被膜ハ何層アルカト云フ事ト

第二ニ其各被膜ガ如何ナル順序デ分化スルカト云フ事トノ二問題ヲ考究スルノガ必要トナツテ参リマス、所ガ此ノ第二ノ問題ヲ研究致シマスルニハ本動物ノ幼仔カラ漸々ニ發育上ノ研究ヲ行ハネバナリマセンガ、此ノ幼仔ヲ得ルト云フハ私共ニハ至難ノ事デアリマスルノデ、第二ノ問題ハ實際不可能ニ歸スルノデアリマス、然レドモ茲ニ一ツ私ノ注意ニ上リマシタル事ハ、有尾兩棲類ノ尾端デハ脊體被膜、脊體ノ構造及ビ脊柱ノ形成ハ共ニ原始的ノ形態ヲ示スト云フ事デアリマス、此ノ事ハ多クノ學者ガ言明シ居ラル、所デアリマス、夫レデ本動物ノ尾尖カラ幹部マデヲ連續的ニ切片ニ作ツテ被膜ノ狀況ヲ追究シタナラバ、其原始的ノ狀態カラ本動物ニ固有ナ

ル典型的ノ狀態ニ移行行ク工合ガ明白ニナルニ違ヒナイノデアリマス、勿論此ノ移行行キノ狀態ヲ以テ直チニ其發育上ノ分レ工合ヲ解決スルコトハ出来マスマイガ、兎ニ角此ノ所見カラ被膜分化ノ一面ヲ視フコトガ出来様ト思ヒマシテ、第二ノ問題ノ解決ヲ企テタノデアリマス、今順序ト致シマシテ先ツ第二ノ問題ニ對スル連續的切片上ノ所見ヲ述ベマシテ、次ニ第一問題ノ解決ニ及バウト思ヒマス

私ハ身長二一仙迷及ビ二六・三仙迷ノ本動物ヲ用ヒマシテ、其ノ一ツ、ヲ横斷、地平斷及ビ鉛直斷ノ「チエルロイザン」連續切片ニ作りマシテ被膜ノ變遷ノ狀況ヲ觀察シマシタ、勿論同時ニ脊體及ビ脊柱ノ形態ヲ追究シマシタガ、是等ノ狀況ヲ一々申シマシテハ餘リニ長タシクナリマスカラ茲ニハ單ニ脊體被膜ノ關係ノミヲ略表トシテ持テ参リマシタカラ、之レニ就テ其梗概ヲ述ベルニ止メヨウト存ジマス、此表ハ横斷連續切片ニ作りマシタルモノニ據テ作りマシタルモノデ、上ノ方ニ數字デ記シテアルノハ尾椎ノ順序デアリマス、尾椎ノ全數ハ二十二個デ、第二十三番目ノハ軟骨性ノ棍棒狀物デ私ハ之ヲ軟骨性終末節ト名ケマシタ、脊體ハ此ノ節ノ末端ヲツツト超テ尾方ニ達シテ居リマス、尤モ此ノ所デハ單純ナ「エベンデーム」管トナツテ、最末端ハ膨大シテ居リマス、脊柱ノ領ニ這入テカラ被膜ノ狀況ハ漸々ト變遷シテ参リマス、其變遷ノ工合ハ頗ル漸徐的デアリマスルクレドモ、私ハ軟骨性終末節カラ第一尾椎ニ至ルマデノ間ヲ五ツノ區ニ分ケマシタガ、此ノ一、二、三、四、ノ間デ段々ト變遷シ、第五區則チ上方尾椎ノ區ニナリマスト遂ニ一定ノ典型ヲ取ル様ニナルノデアリマス

第一ノ區デハ脊體ノ周圍モ軟骨性椎管ノ内壁モ共ニ紡錘狀ノ細胞デ被ハレテ居リマシテ、其層間ニ所々狹イ裂隙ガ出来テ居リマシテ、大體二層ニ分ケルコトガ出来マス、此脊體ノ方ノ脊體被包層ト名ケ椎管ノ方ノ脊椎管被覆層ト致シマス

第二區ニナリマス、以上ノ兩層ノ間ニ淋巴腔ガ出来マシテ其區分が大ニ

明瞭トナリマス、猶ホ椎管被覆層ノ方ハ椎管壁ニ竝列セル上皮様ノ造骨層ト内方ニ向ツテ居ル纖維性ノ層トニ分レ、脊髓被包層モ脊髓ノ表面ニ直接觸レテ居ル部分ハ「ホモグーン」ノ内界層トナリ、其外方ニ位スル細胞性外界層トニ區別スルコトガ出來ル様ニナリマス

第三區ニナリマス繊維性ノ椎管被覆層ト細胞性ノ外界層トノ間ハ判然タル淋巴腔デ分割セラル、様ニナリマス、猶此ノ纖維層ノ層間ニモ小サキ裂隙ガ出來テ居ル部分ガアリマス、(併シ此ノ分裂ハ僅少ノ部分ニ止マルノデアリマス)、脊髓被包層ハ内界層ト外界層トノ間隔ガ著シクナリマシテ、所々ニ裂隙ガ出來テ分裂ノ傾キヲ呈シテ參ルノデアリマス

第四區ニ這入リマスルト内界層ト外界層トハ全ク分レ(其ノ間ニ淋巴腔ガ出來)内界層ハ有血管鞘トナリ、脊髓ノ表面ヲ直接ニ被ヒ、外界層ト細胞性ノ無血管鞘トナリマス

此無血管鞘ト纖維性ノ椎管被覆層トハ勿論立派ニ分レテ居リマス、此層間ニハ第三區ヲ見タ様ナ裂隙ガ現ハレテ居リマセヌ

第五區ニナリマスルト椎管ノ内面ヲ直接ニ被フ層ト、脊髓ノ表面ヲ直接ニ被包スル有血管鞘ト以上兩者ノ中間ニ位スル無血管鞘トナリ然認メラル、様ニナリ、猶ホ此區ニナリマスルト脊椎骨殊ニ椎孔ノ形態モ定型的トナリ、背弓ノ兩側壁ノ内面カラ一個ノ突起ガ現ハル、様ニナリマス、此ノ突起ノ事ニ付キマシテハ後テニ述ベマス

今マデ申シ上ゲマシタル被膜ノ分レ工合ヲ「シエーマ」ニ現ハシテ見マサル

下尾椎領デハ

椎管壁ヲ覆フ層ト 脊髓ヲ被フ層トニ分レ

中尾椎領デハ

椎管壁ノ方ガ一部分分レ 脊髓ノ方ノ層モ亦分レカケル

上尾椎領ニナリマシテハ

椎管壁ノ方ガ一層トナリ 脊髓ノ方ノ判然ニ二層トニ分レル
斯クシテ本動物ニ於ケル定型的ノ關係ガ成立スルコトガ判明トナツタノデアリマス

猶ホ幹椎部ニ於キマシテ横斷切片ヲ作りテ見マサルト、其關係ハ明瞭ニ認メラレマス(標本供覽)

夫レカラ軀幹部デ脊椎骨ヲ背力カラ注意シテ一部破開シ、直ク椎骨下ノ層ヲ開キマス、脊髓ハ血管ノアル直接ノ被鞘ト、血管ノナイ極薄イ透明ノ被鞘トデ包マレテ居ルコトガ判明シマス(標本供覽)

茲ニ於キマシテ、曩ニ申シマシタル諸學者ノ記載ニ立チ返ツテ考ヘテ見マスルニ

其第一 及第三

トハ共ニ三葉ノ被膜ヲ認メテアリマスガ、其分レ工合ガ違ヒ、又何レモ中間ノ被膜ハ硬膜トシテアリマス

今私ガ本動物デ決定致シマシタル三葉ノ被鞘ニツキマシテ、何レガ硬膜デアルカ、又中間ノモノガ果シテ硬膜ト見ルモノデアルヤヲ決スル必要ガアリマス、夫レデ私ハ本動物ノ軀幹部カラ各被膜ヲ別々ニ剥ギ取ツテ其造構ヲ検査シマシタ、其構造ノ詳細ハ茲ニ申述ベル餘裕ガアリマセヌガ、其中間ニ位スル無血管鞘ハ硬膜デナク、蜘蛛膜デアルト信ズルノデアリス、(其造構ハ寫眞ニ付テ御了知ヲ願ヒタイノデアリマス)

然ラバ硬膜ハト申シマス、夫レハ此動物ハ特立シタル被鞘トナツテ居ナイノデ、椎管ノ内壁ニクツツイテ居ル、換言スレバ此動物デハ硬膜兼内椎骨膜トナツテ居ルノデアリマス、尤モ其層間ハ一部粗糲トナツテ茲ニ澤山ノ血管ヲ通ジテ居リマスルカラ一部ニ於テハ硬膜間層ト云フベキ層ヲ認メルコトガ出來マスガ、兎ニ角硬膜間腔又硬膜上腔ト云ベキ部分ガナイ、併シ此ノ硬膜兼内椎骨膜ハ「ピンセツト」ヲ以テ椎骨管壁カラ剥ガスコトガ出來マス、其造構ハ寫眞ノ通りデアリマシテ、可也「デルプ」ナ纖維性デ、血

管モアリ、彈力纖維モアリマス

夫レカラ軟膜ハ脊髓ノ表面ニ直接ニ被フテ居ル有血管鞘デ、澤山ノ血管アリ、又色素細胞モアリマス

軟膜ノ構造ニ付テ特ニ申サバナラヌノハ、軟膜組織ノ肥厚物トナツテ出來ル靱帶デアリマス、之レハ其位置恰モ人類ニ於ケル齒狀靱帶ニ該當シマスルモノデ、第三ノ尾椎區ノ邊デ内界層ノ一部ガ肥厚シ、夫レカラズツト連續シテ全脊髓ノ兩側ニ沿フテ上方ニ經過致シマス、此靱帶ハ人類デハ御了知ノ通り其經過中小サナ枝チ出シテ、硬膜ノ内面ニツキマスガ、本動物デハ上尾椎カラ上ニナリマスルト、一椎毎ニ椎弓ノ内側面カラ出ル小サナ突起ガ出テ夫レニツイテ居リマス、此ノ狀態ハ先程御廻シ致シマシタル寫眞及ビ標本デ明デアリ、又此ノ標本デモ認メラル、ノデアリマス（標本供覽）、サテ此ノ骨ノ突起ニ關シテハ、從來私ノ調べマシタル範圍デハ未ダ見付カラヌノデアリマス、此突起ニ靱帶ノ枝ガツクト云フ事柄ハ本動物ノ硬膜ハ同時ニ骨膜トナツテ居ルト云フコトノ根據トスルコトガ出來ルト信ゼラレマス

扱テ私が此研究ノ目的ト致シマシタル

第一ノ問題ニ對シマシテハ硬膜、蜘蛛膜、及ビ軟膜ノ三被鞘ノ存スルコトガ決定セラレ

第二ノ問題ニ對シマシテハ、硬膜、同時ニ椎骨ノ内骨膜トナツテ居ルノデ、尾尖ノ方デ他ノ被層カラ淋巴腔デ分レ其腔ハ則チ硬膜下腔ト名クベキモノデアル、此ノ腔チ隔テ、蜘蛛膜ト軟膜ガアル、此二膜ハ尾尖ノ方デハ一層トナツテ居ルノデアルガ、中尾椎區デハ、列然淋巴腔チ以テ分レル、其淋巴腔ハ蜘蛛膜下腔ト認ムベキモノデアルト云フ解決チ得タノデアリマス之ニ依ツテ見マスルト本動物ノ被膜ハ先キニ申シマシタル第一、第三トハ一方ハ其分裂ノ工合、一方ハ其名稱ノ狀態ガ違ヒ、寧ロ、第二ノ

× 說ニ最モ近クシテ、而モ内被膜ノ分裂ガ完全トナツテ居

ルノデアルト謂フ事ニ歸著スルノデアリマス（附圖略ス）

● 標 本 供 覽

（全土第三分科病理學部）

村上庄太

一、硬腦膜ノ砂腫

患者ハ四十一歳ノ男子、臨牀上腦腫瘍ノ診斷ヲ附セラレタルモノニシテ、嘗テ癲癇様ノ發作アリ頭痛、眩暈、視力障礙、鬱血乳頭等ノ主徴アリテ、後チ膀胱麻痺、尿失禁、歩行困難、言語障礙等ノ諸症チ續發シ、約ソ半ケ年チ經過シテ死亡セリ、剖檢上前頭部硬腦膜ニ發生シタル鶏卵大ノ一大腫瘍ハ大腦面頭葉ノ上面ヨリ腦質チ壓排シ、又其一部硬腦膜外面ヨリ隆起シテ、骨質ノ一部チ侵蝕ス、他ニ轉移ナシ、鏡檢上ノ結果該腫瘍ハ内被細胞腫ニシテ、處々骨組織ノ新生チ兼ヌルモ、汎ク其組織中ニ石灰沈著チ爲セル夥多ノ層疊體チ存スルガ故ニ、之チ砂腫ト認ム、蓋シ本邦ニハ此類ノ報告稀有ニシテ珍ラシキ一例ニ屬スルモノトス

二、氣管ニ穿孔シタル動脈瘤ノ興味アル一例

此標本ハ無名動脈ニ發生シタル小鶏卵大ノ囊狀動脈瘤ニシテ、生前瘤壁ニ小穿孔チ來シ、搏動ニ伴フテ、時々瘻外ニ血液ノ注射チ發起シ、其結果患者ハ喘息様ノ發作チ生ジ、且ツ時々少量ノ咯血チ來シタルモノト思ヘル可キモノニシテ、臨牀上之チ喘息ト診斷セラレ且ツ結核ノ疑診チ起サシメタルモノナレドモ、全ク此潛在セル動脈瘤ノ血壓ニ因テ氣管ノ前壁ハ破潰セラレ其餘波即チ血液注射ノ爲メ、之ニ對向セル氣管後壁ノ一部ニ潰瘍チ作り殆ンド其部チ穿孔セントスルノ狀態チ具フルニ至リタルモノナリ、蓋シ動脈瘤ノ氣管、或ハ氣管枝ニ破壤スルモノハ決シテ其實例ニ乏シカラズト雖モ、本邦ニ於テハ未ダ此類例ノ報告アリシチ發見セザルガ故ニ、是レ亦珍ラシキ標本トシテ、興味アルチ感ズルモノナリ

● 悪性貧血病原論

(全上第四分科内科學部) 佐々木 達

ビールメル氏が所謂悪性貧血ヲ獨立的ノ疾病トシテ普通貧血ヨリ分離シテ以來、三十有餘年ノ今日ニ至ルモ其病原明ナラズ、著者ハ最近一ケ年間ニ本病ノ特徵ト稱スル血液所見ト強度ノ貧血ヲ有スル患者約四十例ニ就キ、其原病ヲ探究セシニ悉ク其由來ヲ明ニスルコトヲ得タリ、其證明シタル原病ハ十二指腸蟲、條蟲、蛔蟲、痔疾、膀胱出血、子宮出血、分娩、胃癌、胃潰瘍、腸「チフス」、赤痢、肺結核、腎臟炎等ノ二者、若シクハ三者ノ合併ナリ、殊ニ十二指腸蟲及痔疾ノ合併最も多シ、是ニ由テ見レバ惡性貧血モ亦普通ノ貧血ノ加ク、出血、血液毒、若クハ營養障礙ニ基キ發生シ、敢テ獨立的ノ疾病ニ非ザルコトヲ證明シ得タリ、但シ其原病ヲ發見スルニハ既往症及ビ現症共精密ニ檢セザルベカラズ、殊ニ痔疾ノ如キハ普通ノ辨狀肛門鏡ヲ以テハ發見シ得ザルモ、管狀肛門鏡ニ由テ始メテ深部ノ出血病竈ヲ發見スルコト多シ、是亦本病々原ノ明ナラザリシ一原因ナラン

● 一ツノ單簡ナル新式手術方法

(全上第五分科外科學部) 醫學博士 木村孝藏

完全ナル防腐の手術ハ設備完全セル處ニ於テ外科専門家ニ依リテ初メテ實施シ得ラル、モ、然ラスシテ普通一般ハ手術ヲ行フニ際シテ毎ニ複雑ナル手術準備、即チ術者ノ手、手術部、諸種ノ機械、綿帶材料等ノ完全ナル消毒ハ云フベクシテ、甚ダ行ヒ難シ、之レ吾人日常其ノ事實ヲ目撃スル所デアル、此正當ノ準備ナキ手術コソ日常最も數多ク行ハル所デ、從フテ其ノ危險モ亦最も大ナル者デアルト考フ、之レニ由リ余ハ數年來最も實地的ニ

シテ、單簡ナル手術法、即チ術者ノ手、諸器械、「ガーゼ」等ニ複雑ナル消毒ヲ行ハズ、只創内ニ永ク遺殘セシムベキ結紮ノミ殺菌シタルモノヲ用ヒテ何人ニテモ容易ニ實施シ得ベキ手術法ヲ考ヘ、既ニ明治三十九年頃先ヅ動物試驗ヲ行ヒタルガ、其ノ結果十分可畏ナラザルヲ以テ、一時中止シ居シモ、昨年來多少方法ヲ改良シ、現今患者ニ實施シツ、アリマスガ、其ノ實例ハ甚ダ多カラザルモ、既ニ二十回以上ノ實施ニ於テ略々其目的ヲ達シ、防腐の準備ノ下ニ行ヒタル者ト同様ノ經過ヲ取ラシメ得タリ、其手術例ハ水脈腺腫、「アテローム」囊腫、表在ノ小腫瘍抽出等ニシテ、最初ハ單純ナル手術ニ應用シタリシモ近時其成績ニ徴シテ漸次複雑ニシテ、且大ナル手術ニモ應用シツ、アリ、彼ノ余ノ考案セル「ヘルニヤ」根治手術ノ如キ複雑難ナルモノモ、尙此方法ニ依リ克ク目的ヲ達スルニ至リマシタ、今此處ニ供覽スル患者ハ大腿下部ノ切斷(骨成形的グリッチ式)ヲ此防腐の準備ナキ方法ニ依リテ行ヒ、防腐の手術ヲ行ヒタルト御覽ノ如ク第一期癒合ナシ、同一ノ經過ヲ取リタルモノデアリマス

其他本年四月四日大阪高等醫學校病院外科教室ニ於テ會員諸君ニ余ノ鼠蹊及股「ヘルニヤ」根治手術ヲ供覽シ、此際ヲ利用シテ亦無防腐手術方法ヲ實施シ、其成績ヲ得マシタ、茲ニ其患者ノ寫眞ヲ添付致シマス

要スルニ此方法ハ極メテ單簡ニシテ、手術部ハ手術ニ妨ゲナキ限りハ毛ヲ剃リ、又洗滌ヲ要セス、單ニ一乃至二%ノ沃度「エーテル」ヲ塗布シ、(新谷庄吉氏手ノ消毒ノ論文ヲ参照セラレタシ)特ニ不潔ナラザレバ術者ハ手ヲ洗ハズ、「ガーゼ」ハ殺菌セザル新ラシキ物ヲ用ヒ、諸器械モ特ニ不潔ナラザル限り其消毒モセザル者ヲ用ユ、介者モ亦手ノ消毒ヲ行ハズシテ何人ニテモ手術ヲ助ケ得ベシ、今此供覽患者ニ實施セル切斷術ニ就テ述レバ前側ノ大皮膚瓣ヲ作りタルトキ直チニ一乃至二%ノ沃度「エーテル」ヲ綿ニ浸シ、全創面ニ塗布シ、第二ノ後側ノ小瓣ヲ作りテ再び直チニ塗布シ、次ニ全筋層ヲ一頓ニ切斷シテ其創面ニ塗布シ、終リニ骨ヲ鋸斷シ、更ニ其斷面

ニ塗布シ、止血法ヲ行ヒ、創ヲ縫合セリ、約言スレバ新シキ創ヲ作ル毎ニ、其面ニ塗布シツ、進ムモノナリ、手術中用ユル「ガーゼ」ハ勿論消毒セザル新シキ「ガーゼ」ヲ用ヒ、手術ヲ終リ全ク閉鎖セル創又ハ多少「タンポン」ヲ行ヒタル創ニモ、繃帶材料ニ用ユル「ガーゼ」ハ消毒セザル新ラシキノナリユ

此方法ハ主トシテ術後全創面ヲ閉鎖スル手術ニ最モ適スルモ、亦半閉鎖創ニモ應用シテ可ナリ、此ノ何等複雑ナル防腐の準備ナクシテ行ヒタル手術モ今日迄ノ實驗ニテハ防腐の準備ノ下ニ施行シタルモノト同一ノ結果ヲ得タリ、其原理ニ就テハ余ハ既ニ考案ナキニアラザルモ、今日ハ只豫報トシテ實際ノ結果ヲ供覽スルニ止メ、後日其原理ニ就テ報道スルコト、ス、尙ホ余ハ獨リ沃テ「エーテル」ニ限ラズ、他ノ化學的、若クハ理學的、機械的、電氣等ノ刺激ヲ用ユルモ蓋シ同一ノ結果ヲ得ベキヲ豫想シ、漸次試驗セントスルモノナリ

討論

前防玄道

開腹術ニモ用ヒラレマスカ

醫學博士 木村孝藏

動物デハ數例試ミテ何レモ好結果ヲ得マシタガ、人體ニ就テハ用ユル考ヘデハアリマセン

●「クロ、フォルム」死ニ就テ

(全上)

飯森益太郎

シンブソン氏ガ「クロ、フォルム」麻醉ヲ外科手術ニ應用セシ以來茲ニ六十二年、コレニ依テ難治ノ疾病ヲ救治セラレタル者ハ幾百萬ナルチ知ラズ、

然レドモ「クロ、フォルム」ハ決シテ無害ナルモノニアラズ、千八百九十五年獨逸外科學會ニ於ケルグルト氏ノ統計ニヨレバ、二千九百人ニ對シ一人ノ眞正ナル「クロ、フォルム」死 Asphyxie アリト云フ

予ハ近者心臟等ニ異常ナキ二十歳ノ一女ニ、頸腺結核ノ手術ヲ行ヒ、「クロ、フォルム」麻醉中俄然呼吸ニ先チ心臟麻痺ヲ來シ、死亡セシ者(千八百〇二人中ノ一人)、十歳ナル男子ノ包莖手術及四十四歳ノ農夫ニシテ、瘵病焼切ノ目的ニ同麻酔ヲ應用セシニ、未ダ麻酔期ニ入ラザル前絶脈症ヲ來セシコトヲ經驗セリ、然レドモ最後ノ二人ハ幸ニ救急法ニテ恢復セリ、蓋シ予ノ三例ハ其始メヨリ大ナル恐怖心ヲ懷キシ者ニシテ、精神感動ノ心臟麻酔ト密接ノ關係アルコトハ文獻上眞ニ「クロ、フォルム」中毒ト認メラレザルモノニシテ、死ノ轉歸ヲ取リシ實例ニ徴シテ明カナリ、吾人「クロ、フォルム」使用者ハ此ノ點ニ大ナル注意ヲ拂ハザルベカラズ

●腹膜内「ヘルニア」ノ一例

(全上)

村田醇

數年前來胃部膨滿、倉慾不振、腸痛便秘ニ憊ミ、下劑又ハ灌腸ニヨリ便通ト共ニ輕快スルチ常トシ本年一月下旬來上記症狀ノ外頑固ノ鼓腸ヲ發シ、百治效ナク漸次増劇シテ呼吸困難ヲ來シ、遂ニ二月十二日死亡セシ五十九歳ノ一男子ヲ剖見セシニ、下行結腸間膜ノ第四腰椎ニ相當スル部ニ、三指ヲ通ズルニ足ル一孔アリ、小腸ノ一部此ヨリ脱出シテS狀部ノ下端ヲ圍繞絞約ス、コレガ爲メ大腸ハ一般ニ擴大延長シ、殊ニS狀部ニ於テ著シ、即幅徑二〇仙迷ノ一大囊狀ヲ呈シ、上部ハ橫隔膜下ニ達シテコレヲ第二肋骨部マデ壓上シ、下部ハ薦骨岬部ニ於テ恰モ胃ノ十二指腸ニ移行スル如ク急ニ狭小トナリ、直腸ニ移行ス、此移行部ハ即チ脱出セシ小腸ノ經過スル所ナリ、而シテ核小腸斷際ハ著シク壓迫サレタル形跡ヲ有ス、コレヲ約言スレ

(學會)

バ腸間膜ノ裂隙ヨリ脱出セシ小腸ノ一蹄係、狀部ヲ絞約シテ Mechanische Ileus ナ起シ、次ニ Dynamiche Ileus トナリ、大腸ノ甚シキ膨滿ハ呼吸運動ヲ障礙シ、遂ニ窒息死ニ至ラシメタルモノトス、而シテ腸間膜ノ裂隙ハ恐ラクハ先天性ノモノナラン

●直腸脱ニ對スル直腸固定法

(全上) 醫學博士 木村孝藏

直腸脱ニ對シテ近年尙種々ノ方法ヲ考案セラレツ、アルハ時ニ文獻ニ見ル所ニシテ、即チ從來ノ方法ニ不満足ノ點アリ、特ニ大ナル直腸脱ニ對シテ然ル所以ノ證ナリト考ヘラル

余ハ近來約二〇仙迷ノ長サアル直腸脱患者ニ遭遇シ、豫テ考案セル術式ヲ施行シタリ、該患者ハ術後餘症ヲ續發シ、遂ニ死亡シタルヲ以テ術後長日月ノ經過ヲ觀ルヲ得ザリシモ、術式其者ハ簡單ニシテ直腸ノ固定モ確實ナリ、且再發ノ恐少キ者ト思考セラル、ヲ以テ只一回ノ實驗ナルモ之レヲ公ニスル事トセリ

術式 先ツ左下腹ニ於テボウベルト氏靱帶ニ並行シ其約二指横徑上方ニ適當ノ大サニ切開チ加ヘ、腹腔ヲ開キS字狀部ノ下部ヲ摘ミ、上方ニ牽引スレバ翻轉脱出セル腹管ハ容易ニ整復シ、尙ホ少シク上方ニ牽引スレバ遂ニ肛門ハ恰モ漏斗狀ニ深ク陷凹スルヲ見ルベシ、次デ適當ノ部ニ於テS字狀部ヲ横斷シ、下斷端ハ全ク閉鎖シ、而シテ左腸骨窩ニ於テ腹膜筋膜ヲ下層ノ方向ニ切開シ、S字狀部下斷端ヲ該腸骨窩内ニ埋沒シ、斷端周圍ハ筋膜、膜ニ縫著シ固定ス、腸ノ上斷端ハ之レヲS字狀部ノ部下ニ吻合ス、即チ略圖ノ如シ(圖畧ス)

此際注意スベキハ再發ヲ防ガンガ爲メ猥リニ直腸ヲ牽キ上ゲ、強ク緊張セシムルハ反テ腸骨窩固定部(a)ノ破綻スル患アリ、且爲メニ直腸蠕動ヲ障

碍スルノ恐アリ、故ニ多少弛マセ置クヲ可トス

又S字狀部腸間膜ニ生シタル孔及ビ吻合部(b)ト固定部(a)ノ間即チ曠置セラレタル骨管ト腸骨窩トノ間等總テ將來内嵌頓ノ原因トナリ得ベキ部ハ縫合ニ依リ、其危險ヲ豫防セザルベカラズ、以上ノ作業ヲ終リテ腹壁創ヲ閉鎖ス (未完)

學會

●金澤小兒科學會 去七月廿八日金澤商業會議所に於て全會の第一例會を開き佐々木達氏を座長に撰び左の講演ありたり

- 一、小兒脾病の二例 不破才三郎
- 一、小兒に於ける精神病の原因及治療法 松原三郎
- 一、食餌性下痢 岡本京太郎

●金澤醫學會 去八月十日午後三時より金澤醫學專門學校に於て開催出席者二十九名、午後五時閉會、當日講演者次の如し

- 一、化骨性筋炎の七例 小原徳太郎
- 一、右虹彩結核の一例 佐竹秀一
- 一、腹腔に出血せし卵集膿腫に就て 山田謙次

●第九師管軍醫分團金澤研究會●

去八月十四日午後一時三十

分金澤偕行社に於て開會出席者十七名午後五時閉會す、當日講演次の如し

一、上眼瞼下垂症に就て附具果を得たる手術の一例

追 加
一等軍醫 朝倉 重敏
二等軍醫 用吉 隆治

一、隊酒保には如何ある石鹼を擇ぶべきや

一等藥劑官 北村 忠四郎

一、腸管内寄生蟲と窒伏斯感染との關係

一等軍醫 高岡 榮

追 加

三等軍醫正 三崎 麟之助
三等軍醫正 峰 直次郎
長宗我部分團長

一、論 評

●私立衛生會石川支會總會●

去八月十九日同縣小松中學校に於て總會を開き集會者五百餘名、李家知事の式辭幹事の事務報告等に次て左

の講演ありたり。

一、隔離病舎の所感

一、肺結核豫防法に就て

一、家屋に就て

一、健全ある精神

一、賣藥の廣告に就て

一、滿洲朝鮮の衛生一般

一、糖尿病の話

一、衛生學變遷

一、花柳病に就て

村 山 悦 治
鹿 江 佐 六
米 村 吉 太 郎
松 原 三 郎
高 安 有 人
山 碯 幹
佐 々 木 達
山 田 謙 次
飯 森 益 太 郎

一、眼の衛生

一、傳染病に就て

一、眼の衛生に就て

一、衛生上より見たる小松町の風土

一、脚氣病に就て

古 丸 藤 三 郎
小 林 文 泰
小 林 修 藏
佐 野 幹 雄
牧 田 太

* * * * *

通 信

●鈴木寛之助氏通信●

(山碯教授宛)

遣 英 艦 隊 消 息

「ボーツマス」より第五信

「ジブローター」

地中海の西口を扼して直立し巨大なる巖頭「ユニオンジャック」を悠然海風に飄へしてゐる

西班牙領の南端「モロッコ」の北東端と相對して大西洋と地中海との間を括りこむに長さ二十八哩最狭八哩の水路を形成してゐるこれ即ち「ジブローター」の海峡である其の北岸西班牙「マロクイ」岬の東側に於て南北七哩東西五哩の廣さを有し南に開口した灣がある此の灣の東岸を成すものは天下に名を馳せてゐる「ジブローター」の巨嶽で南北三哩東西一哩高さ千四百呎糸の如き砂洲によつて北の方西班牙の本陸に連つてゐる海峡は我津輕海峡に似て

「シプロルター」は其地勢函館に酷似し全山幾百の砲を以て堅固に武装され英國の威武を維持しつゝある四周削れる如き斷崖絶壁此の西麓稍緩傾斜をふせる部分に軍港及市街が建設されて人口約二萬八千を有す

此の地は要衝の場所にて古來各國の爭奪の目標となつたもので英國が之を攻奪したのは二百餘年の昔我國では元祿時代の夢正に醜に年は更つて寛永にふれる其元年である、其の後七十幾年米國が英國に對して獨立戰爭を起した頃西班牙は之を奪還しよゝとして佛蘭西と連合して大に之を攻撃した之が有名なる「ジプロルター」の大包圍で四十三ヶ月に亘る大包圍に對し守將「エリオット」善く戦ひ本國艦隊の來援によつて遂に名譽ある防戦を全ふした爾來英國が力を注いで經營し今や防波堤、船渠工場等も整備し幾万噸の石炭を貯て立派な軍港となつた唯困るのは淡水の欠乏で雨水を溜溜して使用してゐる人家の屋上は雨水を取り得る構造を有し又巨巖東面には「セメント」を以て大面積の傾斜面を造り之によつて雨水を取る大規模の裝置を施してある

此巖壁と西班牙本陸との中間にある約一哩の砂洲に三百間の中立地帯が置かれて其境界に柵を構へ門を設け南境は英國兵北境は西國の兵が監守して居る

緯度は東京より稍高いが氣候の稍温い現時は各種の草花が美しく咲亂て横須賀以來花らしい花を見ない眼には殊に奇麗に見えたとて此の地は風が吹くと霧が來襲すると言ふ面白ひ所である

六月一日入港

するや先づ英國々旗に對し禮砲を行ひ次で軍港司令官ベルバム少將太西洋艦隊司令官カーデン少將及「ジプロルター」總督ハンク陸軍大將と我長官との間に訪問や禮砲の交換が行はれ先づ之れで一通りの挨拶が済んだ禮砲の交換は一筆か二筆に書き得ることであるが事柄は頗る重大なもので中々八ヶ間敷く一發の間違ひも國際間の紛議の因さるゝことがある兎に角轟然

たる巨音を發するものであるから一度失策をやれば取返しつかぬものとふる單に儀制上の禮式に過ぎないけれども事は面倒で隨て之を行ふ人は中々油斷が出来ぬ、三日は

英國皇帝陛下御誕辰

午前八時在泊英艦に倣して滿艦飾をふし正午皇禮砲を行つた、而して對岸(灣の西岸)「アルゼシラス」(「モロッコ」問題にて有名なる所「ジプロルター」より漁船三十分にて達す)の西班牙總督が軍艦に搭じて午前十時來艦午後四時頃退艦した、これに對し禮砲を行ふのの日觀兵式が行はれ「アルゼシラス」の總督は之に招待されて來たのだぞ、我司令長官も招かれて之に參列された又夜は總督官邸で 皇帝御誕辰祝賀のため「アットホーム」を催され我艦隊から長官以下多數の士官招待を受けて出席した天氣よき日は對岸亞弗利加の山色民家明かに見えて呼べば應に答へんとす而して港前を東西に航過する船泊は實に多く二六時中常に五六隻の船影を見ざることは、又對岸「アフルカ」の「ゲンダール」も交通盛である、此所て會した軍艦は英國の「ロンドン」「クレスセント」「アメシスト」「コルモランド」佛國の「フリアン」土耳其の「ハミディー」(戴冠式參列艦)等で一才賑ひであつた

六月五日午後六時出港

「ポートランド」に向ふ此の日午後我長官から英總督司令官以下重なる人を鞍馬に招待して饗宴を張られこれで此の地の御別れとなつた艦の速力十哩靜かに「ジプロルター」海峽を西航し大西洋に乘出し總員に對し有名なる「トラファルガー」海戦の講話を行はれた、英國が今日の強きを致せるもの此の大海戦を以て最大なる直接の原因さふす、數日前「モルタ」海峽に日本海海戦を記念し今日又こゝに同盟國の赫々たる大捷の跡を偲びチルソソ將軍の偉績を回顧し彼此相對比して吾人は私に愉快に堪はざるものがある

夜半「トラファルガー」岬の燈光を右舷に見て航す海光燈色百年の昔を語りつゝある様か感かした

翌六日午後「セントアインセント」岬を過ぎて總員に此地海戰談話あり「トラファルガー」海戰以前に於て英國が有名なる大捷を獲たる此の海戰を追回し歴史を回顧して他山の石とすべく實地教育としてこれ以上恰適なものはないと思ふ、夜半葡萄牙の首府「リスボン」の沖を過ぐ此の夜より天候陰曇時々雨あり風波稍大なる七日英國軍艦「デュークオブエデンバラ」と會し八日朝音に聞えし「ビスケイ」灣へと差掛つたが極めて平靜其翌日は時々濃霧に遭つたが無事に過ぎた

「ジプロルター」英國間は世界に於て交通頻繁なる場所の一と稱すべく眼界常に七八隻の船影を見ざると云く之を我沿海の交通最も繁き所に見るも一日僅かに十隻位に會するが關の山迎も比較にはなからふ

十日早朝濃霧の裡に英國の陸影を認め午前九時「ボートランド」港前に到り禮砲を行ひ在泊英國艦隊司令長官から好意を以て送られた士官の嚮導により兩艦とも防波堤内に双錨泊を行ひこゝに

「ボートランド」に入港

愈々英國に到達した港内には英國「ホームフリート」殆んど全部が在泊し數十の艦艇碇泊壯觀を極めて居る、日露海戰の教訓に鑑みて英國が建造し世界を驚かしたる「ドレッドノート」は居あいが其の改良された精銳なる堅艦十二吋砲八門又は十門を有するもの十餘隻其の他に新銳の諸艦があつて英國艦隊の主力が全部揃つてゐるので眼が覺る程の光景斯くも立派な巨艦數多を見ては如何にも羨望の至りに堪えなかつた司令長官ブリッヅマン大將の旗艦は最近に竣工した二万六千噸の「チブチューン」で我艦は此の艦の隣に接して碇泊した、鞍馬は我海軍最新の「堅艦」である、乍併此所へ來てみると顔色ふしだ

「早く立派な艦が欲しいふ」とは衆人齎しく感じ齎しく叫んだ所であつた

(通信)

こゝで双錨泊に就て少しく説明しよう、艦が碇泊するに一錨を用ふるものを單錨泊と云ひ左右各舷の錨一挺宛を投下するものを双錨泊と稱する、前者は投錨拔錨共簡單であるが艦が風や潮流のために錨を中心として振れ廻る時に錨の圓の面積が大なる双錨泊は此の圓が小さくて濟む故に狭い場所又は多數の艦艇の集合する時には双錨泊を用ひる、横濱、神戸の觀艦式の際にも双錨泊を行つた、注意深い人は之を見て記憶して居ることと思ふ、双錨泊をしてゐる時艦が振れ廻るを錨鎖が燃れるのを防止するためには必ず「ムーリリングススイブル」あるものを用ふ、艦が投錨して位置が適當であるや錨鎖を一方宛切つて此の間に「ムーリリングススイブル」を取り付ける、斯くして置くに錨鎖に燃りが來ても「スイブル」が廻つて燃りがかゝらぬ様にするのである

投錨後我長官と英國長官との訪問の交換士官の往復等頻繁で、英國駐在の我海軍士官もやつて來る御名代の宮殿下御一行も既に御着英御機嫌益々麗はしく在しますと拜承して一同大に歡喜した而して艦隊員の元氣は旺盛で艦の内外活氣満々としてゐる、「ボートランド」は英國南岸の一港「ウエーマス」の南に砂洲によつて連なる一小島の名である此の島は若石より成る、これから「ウエーマス」との間に砂洲の東方に防波堤を築き數十の大艦を容るゝに足るべき大なる港が造られて「ボートランド」港と稱せらる、此の所は要港さでも言ふべきもので炭水補充其他一寸した一通りの設備がしてある但し上陸するものは皆「ウエーマス」の方に行く流車は倫敦に通じて約百四十哩約四時間程である

英艦隊と來往交順茲に四日に亘つたが彼は十四日巡洋艦隊翌日戰艦隊の順序に出港して觀艦式場に赴いた爲め港内俄かに寂しくなり英國の二隻の小巡洋艦と土耳古軍艦「ハミ・デイー」(本艦に次で出港せるもの)と英驅逐艦のみとあつた

十四日下士卒數百名「ウエーマス」市長の歡迎宴に招待され夕方より行き主

入側には英艦の下士卒多數出席互に歡を盡して優待され夜半歸艦した又士官以上は少し宛倫敦見物と出掛けた「ボートランド」入港以來天氣晴朗勝ある好天氣と聞いたが倫敦も同じく天氣よく日頃多き濃氣も薄く見物人は日光を見るこゝが出来眞の觀光をやりましたと言つて居た

艦は式場参列の準備として手入をふし内外を奇麗に塗り換はれ立派にあつた十九日朝英國驅逐隊全部約三十隻土耳其及伊太利軍艦(後者は十六日入港)の出港に次で我艦隊も出港した前日來強吹せる西風吹き居りて風波稍劇しく雨を降らし稍寒きを感ず午後二時半

「スピットヘッド」に到着

豫定錨地に双錨泊を行ふ英國艦隊の全部は既に位置に就き秩序整然實に立派である外國軍艦も大部分到着し露國の「ロシヤ」は我艦の隣りに泊して居る、此の如き場所で投錨を行ふは列國還視の裡に仕事をなすもの其の出來榮は國家の榮辰に關すると大である此日の如き風は強く豫定位置の兩側には既に他艦のあるあつて艦の運動を制限さるゝこと夥しかつたけれど無事に巧みに行はれた單に艦を動かして投錨するならば容易だけれど各艦一直線上に碇泊するを要するので二三米の偏位出入も著しく目立つものでは是を巧妙にやるには中々熟練を要するものである外國軍艦には英國の士官一人宛配乗して諸事の便を計つてくれる、觀艦式に關する各種の次第書も配付され今では準備整頓し觀艦式の當日を待つ許りで英國側は我士官下士卒を各所に招待して好意を盡してくれる

入港するや國旗に對する禮砲「ボーツマス」鎮守府司令長官に對する禮砲もすみ茲に艦隊は横須賀を出て八十日其任務たる觀艦式参列のために式場に到達したのである

「スピットヘッド」の式場は英本陸と「ワイト」島との間にある狭水道で其北岸に「ボーツマス」軍港がある「ワイト」島は景色のよい島で見渡す限り繪の樣である此の地の緯度は約北緯五十度四十分樺太の日露境界線より北であ

るけれど、氣温は六十度内外で日本と比較すると寒さが少ない又面白いには緯度が高いため晝が永く朝は三時に明るく暮るゝのは九時過ぎで何となく嘘の樣であるが事實だ

も一つは磁石が決して北を指さぬことで元來磁石は眞の北を指すものでないこれ地球の兩極と磁氣の極とが一致せぬため偏差と言ふものが起るためで日本などでは五六度を最大とする故大体に於て磁石は北を指すと言ひ得るけれど此の邊では二十度位違つてゐるから磁石は北を指すものなどと思つてたらそれこそ大なる失策の因とある、猶磁石のことに就ては他日更に記すべき機會があると思ふ

英國を辭し本日當地着。小生は後ち伯林。ドレスデンへ巡行可仕候來る廿六日佛大統領フハリエル閣下に謁見陪食するの光榮を得べく又多分叙勳のこゝろ有之筈に御座候

明治四十四年六月二十一日

佛國ル、アープルにて

鈴木寛之助

「ローサイス」より第六信

「ボーツマス」

は英國南西の鎮守英國最大の軍港として海陸百般の設備整頓充實し鎮守府あり工廠あり各種の學校あり海には幾箇の海堡陸には砲臺防備儼然英吉利海峡を扼守してゐる、四方海ある英吉利帝國之を八ヶ間敷云へば「グレートブリテン」及「アイルランド」の聯結より成れる聯合王國は南は佛蘭西から北は那威に至る歐羅巴各國と相對し海上に羅列せる島嶼の集團で佛蘭西との間には西に英吉利海峡がある此の海峡西は「ランズユンド」と佛國「ユーシヤント」島に始まり東の方三百哩英佛間最狭の水道「ドーヴァー」海峡を

經て北海に連なる「ドーバー」海峡は北は英國「ドーヴァー」南は佛の「カレー」の間に挟まれ其幅僅かに二十五哩「昨年アレリオが單葉飛行機に乗じ千古の英雄「ナポレオン」不能の文字を笑つた彼すらも「六時間我意の如くふさしめば」と浩嘆「長大息した此水道を「カレー」から「ドーヴァー」に掛けて横斷飛行を敢行し美事に成功して世界を驚かし海を以て金城の鐵壁と誇れる英國民を慄慄せしめたのは今猶人目に新ふる所である

英吉利海峡中部の北岸に景色の美しい「ワイト」と言ふ島があつて（東西約二十哩南北十一哩の菱形の島）參差出入せる英本國陸岸との間に幅約一哩乃至二哩半の水道を成し其東半が「スピッドヘッド」と稱せられ西半は「ゼ、ソールレント」と呼ばれてゐる、此の出入せる陸岸に東方から「チエスター」「ボーツマス」「サムザムプトン」の順序に三港がある今度觀艦式が行はれた「スピッドヘッド」を隔て「ワイト」島の東部と相對してゐる邊に「サウスシー」「ボーツマス」「ランドボート」及「ボートシー」の四市區が相隣接し結合して人口二十二万の大市街をふしてゐる是れ所謂「ボーツマス」で港口は狭くて僅かに八分の一哩であるが内部は稍廣く「東西約四分一哩南北約一哩」其一部は深く淺渚して現時に於ける巨艦の入港に差支はいけれど大艦隊は港外の「スピッドヘッド」に碇泊する、すつと昔から軍港として働いたもので中々面白い歴史を持て居る有名な英海軍提督の多くは此所を發點として海上を横行闊歩した而して此の地に船渠が造られたのは七百年以上古いことで其後幾多の變遷を経て今より四百十幾年前世界に於ける最初の乾船渠が建造された、此の地に於ける觀艦式は千六百九十八年（二百三十三年前）露國の彼得大帝の爲めに行はれたものが最初である、其後幾度か行はれた二十四年前ヴィクトリア女皇の即位五十年祝典其後同女皇の即位六十年祝典に際し觀艦式が行はれて後の時には我海軍からは當時英國で達成した軍艦富士が參列した「ボーツマス」は四邊の地勢平々坦々として且海が稍淺く港の設備防備とも大なる人工を加えてある、一休各國の港灣は人

工を加へて始めて用に立つて居るものが多數を占めてゐる、是れを我國の港灣の多くが僅かに人工を加へたのみで何うにか用を爲して（決して満足出來ぬもので大に修築するを要するもののみであるけれど）居るものに比較し吾人は天恵の我國に大なるを感謝せざるを得ずと同時に各國到る處の港灣皆人工を以て修築を施し設備完成立派な港とあつてゐる（勿論諸種の要求が斯くあらしめたに由るものであるが）を見ては我邦人が天恵にのみ依頼し自から努力せぬこと幾千年頗る憾なき能はず而して今や其天罰觀面に來た様に思はれる、港内に百六十年前「トラファルガー」の海戰に於ける「ネルソン」の旗艦「ヴィクトリー」が繋がれ今尙能く保存されて鎮守府司令長官ムリア大將の旗章を繡がへし行て訪ふ者には丁寧に案内説明してくる「ネルソン」負傷の場所「ネルソン」臨終の場所等はよく昔のまゝの有様を保た來め艦内には當時使用の砲類其他諸器具を其位置に備へ訪ふ者をして當時し追懷して感慨に堪へざらしめる

却說觀艦式と觀艦式とは如何に委しいことは既に新聞で知られたことと思ふ故大體に就て書く事とし順序として日々如何なる儀式が行はれたか英政府の定めた次第書を摘錄する

觀艦式に關する宮中行事次第書 （摘錄）

六月十九日 各國御名代特使御着論

「バッキンガム」王宮に於て御晩餐

六月二十日 兩陛下の各國御名代特使御延見

「バッキンガム」王宮に於て正式御晩餐

六月廿一日 海外諸領地總督の接見

「デュークオブコンノート」殿下各國御名代特使を「セントゼームス」王宮の御晩餐に御招待

六月廿二日 戴冠式

六月廿三日 市中御行列

兩陛下外務大臣の晚餐に御臨幸

六月廿四日「ボーツマス」に於て觀艦式

式後兩陛下御召艦にて「ボーツマス」御滞在

六月廿五日 兩陛下「ボーツマス」より還御

各國御名代特使「ウインズル」宮城御訪問

六月廿六日 「コペンハーゲン」の「ローヤルオペラ」座に於て正式御觀劇

六月廿七日 「ヘーマーケット」の「ヒズマゼステイ」座に於て正式御觀劇

六月廿八日 各國御名代特使御退倫

(以下省畧)

戴冠式參列列國の海軍々々接待次第書 (摘錄)

六月十九日 諸外國軍艦逐次「スピドヘッド」に到着

六月二十日 外國士官及英國海軍士官と交驩のため園遊會

六月廿一日 外國司令官艦長及各艦より士官若干戴冠式觀覽のため上倫

六月廿二日 戴冠式當日 (英政府より招待)

各外國司令官及代表艦長を「ウエストミンスターアベ」に招待し各外國士官(前日上倫)も戴冠式行列觀覽のために案内す

午後「ボーツマス」に於て各國下士官運動會

「ボーツマス」に於て英艦水兵及海兵五百人の主催にて外國軍艦より下士官總計一千人を宴會に招待す

外國軍艦下士官若干を觀劇に招待

午後九時半より十一時まで時艦隊の電燈艦飾

外國司令官及士官市中御行列觀覽

午後外國士官倫敦より歸艦

六月廿三日

午後「ボーツマス」市長主催外國軍艦下士官園遊會

觀艦式 陸下午後二時半「ヒスピットヘッド」署

六月廿四日

御午後九時より十一時まで艦隊電燈艦飾 (以下省畧)

六月二十日「スピットヘッド」の觀艦式場には英國艦隊を始めし參列の各國軍艦總て其位置に着き觀艦式の當日を待つばかりとあつた、約一ヶ月半の間天氣晴朗氣候溫暖英國の天候としては寧ろ怪異とすべき程の好晴が連續したが十八九日頃から漸次英國固有の天氣とあり毎日天空陰曇雲影暗晦強風吹いて時々微雨を交ふると云ふ工合で誰も戴冠式及觀艦式當日を氣遣つてた

戴冠式

こは讀んで字の如く「キング」(本來は「王」と言ふ字で英國では是を用ひて吾人は普通英國皇帝と稱し慣れてゐるから便宜上是等を混用する)が王冠を戴く儀式で之を終つて名實共に皇帝とある即位の大禮とも謂ふべきもので英國では昔は國王崩した後新王の戴冠式を終るまでは王位は空位のままに置かれ新王は王族の中から國會及人民に依つて撰ばれ位に即き戴冠式を終つて始めて政を執り茲に新王治世の第一日が初まるのであつた、然るに「エドワード」一世(六百四十年前即位)は撰ばれて王となるや其自から政を行ひ「エドワード」二世(六百四十年前即位)は先王崩じた翌日から政を見共に戴冠式舉行の前に政治を行つたもので爾來今日まで此の風に從つて來てゐる即ち王位の空位である時があつた、昔は戴冠式を行ふ時には王は倫敦塔に居て式の當日行列に作つて倫敦市中を進み「ウエストミンスター」の宮殿に行きそれから「ウエストミンスターアベ」と言ふ寺に往て式を擧ぐるの列であつたと云ふ話である

戴冠式に用ふる王冠は聖「エドワード」王冠と稱し古い歴史のあるものである此の他「ヴァクトリア」女皇が造られたものがある、先帝「エドワード」七世も是を用ひられたと聞ひて居る、今回の式は聖「エドワード」王冠を以て式を行はれ式後先帝の用ひられた「インペリアルクラウン」(直譯すれば帝冠とでも名くべきか)と交はられると言ふ話だ、此の先帝の冠と言ふのか現時價值が知れずと稱せらるゝもので黄金及銀を以て造られこれに各種の

寶玉を鑲めたもので世界に於ける有名な金剛石や紅寶石、綠寶石、眞珠等が約二千四百個(大部分は金剛石)用ひられ光輝の燦爛帝者の威を示してゐる。當時は倫敦塔の寶庫に納められ公衆にも觀覽せしめてゐる。

戴冠式に附隨してゐることの内重なるものは此の機に際して邦家に勳功ある人を貴族に列し爵に叙し又勳爵士「ナイト」の位を與へる等のことを六月中旬是が行はれ恩典に浴したものが多數あつた。戴冠式の儀式も時代により多少の相違があつて現に今回のものと先帝の時のものと異なつてゐる。又此儀式は全く宗教的のものであるが時には政治的に利用されたこともあつた。云ふ而して昔は兎に角現時に於ては此儀式は余程形式的となつて唯昔の形式を逐ふて行ふと云ふ様におつて來たとか、戴冠の式其ものより此の直ぐ前に行はるゝ聖油を以てする淨めの式が寧ろ重きをなしてゐる位ひたとも聞いた式の大体の順序を書いて見よう。皇帝女皇が「バツキング」王宮から出て行列を作りて市中を進み「ウエストミニスター・アベ」に到着する、祭事は「キング」が寺院の西屏から入らるゝ時に始まる。「キング」は「アベ」中央の式場まで二人の僧侶に助けられながら行列を以て進まる。

式場に着御後第一の儀式其名を直譯すれば「承認式」とも言ふべきものが行はれるこれは古への國王撰擧の遺風が形式的に残つて居るものである、此の式の最後に式場の全部から『神々皇帝「サローン」を讃め給へ』と念唱の聲が起る、これで「キング」は玉座に着かれる、次で祭式中最も顯著なるものである所の「キング」が誓書に署名する式が行はれる此の次が最も壯嚴なる聖油の式である「キング」は玉座を立たれ此の時迄着けて居られた深紅色の被衣の如き式衣と冠とを脱せられ戴冠式椅子に進み倚らるゝ、體て大僧正が聖油を「キング」の頭、胸、兩手の掌に注いで「キング」に對し油の洗禮とも言ふべきものを行ふ、次で「キング」は黄金布の式衣を着し劍、腕輪、其他儀式用の寶器を捧ぐるを受けられた後正義を行ひ教會を保護し過を改め

寡婦孤兒を助けべく訓誨を受け給ふ、此の儀式の始終を通じて各種の聖歌が詠はるゝ、これが終ると戴冠式である戴冠式石の上にある椅子に倚らせ給へる「キング」が持ち居らるゝ各種の寶器が王笏及王杖(頭に鳩を附したるもの)と換えられる、次で「カンタベリー」の大僧正が「ウエストミニスター」の監督から聖「ワドワード」王冠を受取り『王に神惠あれ』と唱えつゝ「キング」の頭上に之を置くこれから 女皇の戴冠式が行はれ猶二三の祭式があつて戴冠式の大禮は終るのである、是等の式中 皇帝女皇が祭壇に進み供物をさす等のことあり最後に普通の祭式があつて其の終るや 皇帝女皇は聖「エドワード」の教堂に入り茲で 皇帝は聖「エドワード」王冠を帝冠に換へらるゝ。

以上は唯書物と耳に依つて覺束なくも述べて書き列べた式の概畧である錯誤も又足らぬ所もある。戴冠式の始終を通じて「キング」の用ひらるゝ式衣が形は同じながら四種ある又戴冠式椅子は見た所頗る粗末な様に見えるが古いもので幾多の歴史を有する由緒あるものである此他儀式用の寶器即ち當時は倫敦の寶庫に納められてゐるものが澤山にあるけれ共此邊で切上げるとする。

愈六月二十二日

が來た朝から陰雲去來し空模様物凄く西風強吹し時々驟雨微量ながらを伴つて好ましからぬ天氣である、倫敦の市街殊に行列の通行道筋に當る處は王冠、楯、花環等の形をしたものや花など美しく飾られ各種の凱旋門様の「アーチ」も建てられて幾百日前から準備し待ちに待つた當日とて又英國は勿論世界の隅々から我も／＼と行列觀覽にやつて來たもの頗る多いこと、市街は非常な雜鬧である警官は街衢を警戒し道筋の町から他の町へ出づべき大路小路は木柵と門とで固められ門は式の當日午前二時とか三時とかに閉鎖され柵内人の濫入は防止され朝とあつて開門されたが警署の軍隊が道路の兩側に人の城を造つてそれより内に入るを許さない兩側には階段

を設け各家屋は窓と云はず屋上と云はず見物人で充滿し車輛の交通は全く禁じられた故流石繁華の中心「トラファルガースクエア」「チャーリングクロス」「ボワイホール」等の街路人の波こそ打寄すれ日頃は幾百と連續して走り来る自動車馬車其他の車輛一輛も見えず見物席は其値一人分五十圓さか百圓とか甚しいのは何百圓と云ふ程で貧乏人には逆も傍へも寄りつけぬ、そこで前夜から通御の道筋に來て徹夜して好位置を占めてるものが幾万人と云ふ數を知らぬ位い、是等の人々が新聞紙を路上に敷て一夜を明かした後紙を捨て、去つた其紙が雪の降つた様に路上一面に散亂して残つてた

前掲の接待次第書にある通り接待されて參列各國軍艦から上諭した士官百餘名「グリニツチ」の海軍大學校から朝七時に正服で「テームス」河を遡つて倫敦市の中心に上陸し豫て定められた位置に就いた時に八時頃此の時町兩側は觀覽者で滿員の姿、キングの通御よりも三時間位早く往かふければ愚圖くしてゐる間に入ることを許されふから皆斯く早くからやつてくるのである觀覽者の席は紅綠白紫金線銀條相混じり映ひ春の花秋の錦よりも鮮麗に見ゆる、此所に大粒の雨がポツ／＼と遠慮ふくやつてくる、さう大變、婦人連大恐慌、蝙蝠傘が廣げられる此他雨を凌ぐに足るべき者は頭上から掛けられる、今迄春野の花毳の如く見た處は百鬼靈行の狀を呈した餘り多く降らぬので皆々大安心こんが／＼が二三度あつた

時刻が進んで八時半頃とあつた「ウエストミンスター」の式場に參列すべき内外國文武百官は馬車自動車を驅つて「ウエストミンスター」に急ぐもの漸く多きを加へ、我が東郷大將乃木大將も自動車で行かれる、各種の正服を着た各國各階級の官人の來往、何が誰やら又何やら知り得ぬものばかり

此の日の行列は三段に別たれ第一は各國御名代特使及び英皇族の一部第二は皇太子(ウエルス親王)及皇族の行列第三は 兩陛下の行列と云ふ順序

で第一段は午前九時半に「バッキンガム」王宮を出て來た此の内に

我名代の宮兩殿下

も在せられて希臘の皇太子及同妃殿下も馬車に御同乗遊され英姿飄爽として行かれ給ふ、天氣が前記の如くであつたから多くの車輛は朝早く「アバ」に行つた東郷大將の自動車及其他僅少のものを除くの外覆蓋を掛けけるので車内に居る人を能く見ることが出来あつた、第二段の行列には英皇太子プリンスオブウェールズ殿下が御同胞と御同乘にて行ける、第一段第二段とも先驅後殿とも幾す騎各種の儀仗兵が附隨して各貴顯は其間を馬車で行かれた、第三段は「キング」の行列各種の近衛兵隊前後を警衛し英國海陸軍の名將勇士雲の如く騎馬にて龍車の前後に隨ふ、最も目立つたのはキツチナー元帥で龍車の直後に單騎陪從した居た、皇太子殿下通御の際も 兩陛下通御の際も觀覽の方衆から盛ふる歡呼の聲が起り帽を振る手巾を振るあらゆる方法を以て歡呼の表情をやる英國の國歌が軍樂隊から起る兩側警固の軍隊は捧銃する折から雲間を漏れて來た日光が銃劍に映ひ光茫然然其間を 兩陛下は八頭の白馬に牽かれたる國車(原名「ステートコーチ」直譯すれば上記の如く黄金色の四輪車で古き歴史と由緒あるもの内外とも彫刻と名畫を以て飾られてる形は我鳳輦に似てゐるけれども車上に鳳の如きものがあひ今回の儀式のために修理を施すに何万圓を要したと言はるゝもの戴冠式の様な場合にのみ用ふる寶器の一つである)に乘られ臣民の歡呼に對し一々上体を少しく前に屈めて會釋し給ふ「キング」は白色の肩衣様のものをつけた深紅色の式衣に大黒帽の如き形して上が白く下が紫で下部の周圍を黄金と金剛石とで飾つた冠を用ひて居れる儀仗及警衛の軍隊が又一隊の觀物である銀帽銀甲堅く鎧へるもの黒衣赤袴のもの金線眩きもの黒帽白羽を翳さる風に飄がすもの大きな熊毛の帽を白革で腰にかけてるもの白衣綠服紅黃白紫黒綠の色彩を取交ぜ之に金色銀光を加へたる幾十様の正服を今日が晴れさ着飾つて行列に在るものは多く騎したり、肥馬に跨が

り手綱窓やかにかひ繰りて馬の足並打揃へ四列の隊伍整々として亂れず徐々と進む様百花開發して世は春の光りの行き渡らぬ限あき如く太平の祥兆茲にも現はれて華麗秀麗眼を奪ふ之に加ふるに殖民地軍隊の將士あり是亦錦上花を添ふるものは等の光景眼之を見るも頭に了解する違ふき間に行列は行き過ぐる唯華美ふりと謂ふ外形容が出来ぬ若し是等の軍人を兵種階級等に従ひ一々識別する事が出来たならば如何に興味深いものである一か又兵種に従ひ或は部隊を異にするもの皆軍樂隊を有すこれが又様々制服で面白く奏樂する日本あどでは迎も見られぬ圖である

行列は進んで「ウエストミンスター」の式場に着御戴冠式の大禮を行はせ給ひ 兩陛下さも頭に帝冠王冠を戴かれ再び國車に乗御往路さ大分異れる道筋を行列を以て進みつ「バッキンガム」王宮へ還幸します、此の時が戴冠式の行列中最も見るべきものと聞いた式の當夜倫敦全市は五色七色の電燈で美しく「イルミチーション」を施され彩光天を焦し夜猶晝の如く之を觀んがために集まれる士女幾十萬車輛の通行は禁止され「ピッカデリリー」邊は幾町に亘りて人の海を成し波を打てども身動もふらぬ程是等の人が皆口を開いて上を向いて波のまにまに見物してるのだから面白い

翌二十三日は 兩陛下倫敦市中を行列を以て進み給ふ今日は「キング」は陸軍元帥の正服を召させられ緋色の上衣白羽風に纏れる制帽帝者の英風凜然として幌を除きたる馬車の上八頭の馬に牽かせて行き給ふ此の日の行列は本國軍隊に加ふるに海軍陸戰砲隊各殖民地軍隊の代表部隊を以てし英國及其領地のものゝみを集めたもので幾十樣態の軍聯が隊伍の整々四列縱隊を以て進み行く濠洲、「カナダ」亞弗利加、印度等世界各地の軍隊の共進會とも謂ふべく大英帝國の威武を此所に示して悠々として、世界帝者の邦國多きも此の如きは英國にして初めて爲すを得べく他國の得て模倣するとの出来ぬ所で英國民の誇りも亦茲にありと云はればあらぬ是等軍隊は戴冠式參列のため特に派遣されたもので倫敦市中「ハイドパーク」「レチエンドバ

ーク」を初めとし各公園に其の多數が幕營して居た

二十二日「スピッドヘッド」在泊の總艦は午前八時滿艦飾をなし正服を着し正午皇禮砲を行ひ遙拜式を施行し英國々旗を奏して敬祝の意を表し夜は電燈艦飾を行ふ豫定であつたが風雨に妨げられて行はれなかつた

此の日全英艦隊を指揮せるムーア大將は「スピッドヘッド」の英國及外國艦隊を代表して 陛下に奉祝文を電奏し 陛下より優渥なる御返電を賜はつた、二十三日夜多少の風雨があつたが昨夜の代りに電燈艦飾を行ふ

却說二十日午前には各國指揮官各代表艦長鎮守府を訪ひ鎮守府司令長官其他諸官との面接が行はれ我艦隊からは長官と鞍馬艦長が行かれた午後は鎮守府に園遊會が催され英海陸軍士官と外國士官相會して交歓し我長官艦長以下多數の士官が出席した

二十一日我下士卒三百名「セーラーズレスト」(ウエストン)嬢の經營に係る下士卒集會所)に招かれて饗せられ二十日は「ボーツマス」「ユーナイテッド・トサール・ヴィス」「クリエーショングラウンド」に於て

列國海軍下士卒聯合競技大運動會

が催され外國各艦から下士卒五十五名宛出席して三人四脚千六百米競走綱引障礙物競走其他各種の競技を行つた、我下士卒の競技成績は平素斯ることを餘りやらぬものとしては割合に良好で參加艦數十八隻參加人員千名我參加人員百十名に對し合計三十賞中六賞(一、二、三等各二)を得て大に愉快此際端舟競漕があるかも知れぬと多少豫期してたが遂に無かつた、又英艦の下士卒は主人さあつて接待に従事し競技に參加せなかつた運動會後「チーブルバラックス」に於ける英艦下士卒主催の宴會に招かれ又觀劇に案内され主客歡を盡して紀念すべき大祝典の祝宴は忘れ難き紀念を主客の頭に刻して愉快に終つた此の宴會の際集會の下士卒より奉祝の微衷を電奏し長くも難有御返電を賜つた、此の日風強く降雨あつたが運動會は滞りなく進行したのは何よりの幸であつた

(通信)

二十三日午後下士百名「ボーツマス」市長に招待されて園遊會に出席し英國下士卒と共に歡待を受け紀念品を贈られ斯くして連日各所に催されて應接に違がなかつた下士卒の招待も茲に終つた、准士官以上に對しても色々の招待があつたけれども煩を避けて畧す

着英以來諸事の紛雜に忙殺され艦隊消息の後れたのは陳謝する所である廿六日巴里的南五十哩にある「シャトール、ラムプリーエ」に於て「フワリエール」大統領閣下に見、陪食、了りて小生は「オフィシエ、ドラレジオン・ドノール」勳章を贈與せられ候

七月二十九日

山崎先生

佛國ル、アール

鈴木寛之助

●小山田基氏通信

(松原教授宛)

本年は到る處暑さ烈しき由承はり候其後如何御暮らし遊ばされ候や定めし御多忙のこと、奉存候近時更らに學報に接せず淋しく存候小生は御蔭様によりて幸に頑強相不變産婦人科及び病理學教室に閉ぢ込み余暇には小兒科を覗き居り候時節乍ら候自愛專一に御座候。乍憚宮田、石川岡先生へも宜敷御傳へ下され度候、小生は後れ候へ共小閑を利用してウヰーン、ドレスデン、ライプツヒ、ハルレ、エーナ、ウエルツブルグ等を見學して去月六日當シユンヘンに歸市仕候

碎くる涙に送られて

露すしたる松原に

三郎夜半の心かも

實に涼しやのいそまくら

御免下さい

八月十五日

ミュンヘン市にて

小山田基

●永井人雄氏通信

(高安教授宛)

謹啓益々御多祥の段奉賀候降て迂生は去る六月十四日以来臺中歩兵第三大隊に加はり臺灣新竹廳下蕃界に對蕃服務中の處今回臺北歩兵第二大隊附と相成り七月廿八日宜蘭方面に轉戰致し其間常に健康服務罷在候間乍他事御放念被下度候、却說御承知の如く生蕃討伐は圖らざる困難事業にして到底兎狩の比に無之候蓋し生蕃は体軀頗る輕捷にして生來の山間生治は驚くべき習性を有し急峻なる山路を上るにも絶壁の斷崖を下るにも巨大の樹幹を攀上するにも鳥猿の夫れにもやあらんと思像せらるゝ如くに候而かも彼等の對敵動作は亦頗る伶俐にして天險の利用掩堡の工作確實なる狙撃は我熱心に教育せる兵卒の戰闘動作と匹敵にして嘗て幾多の我將士を苦しめたるも故なきにあらず全く幼少の頃よりの習性に依ることも云ふべきか例へば彼等が狙撃するに當りても決して文明的の銃器に附着せる照準機を利用せず弓に矢をつがへたる如くに自然の姿勢を以て相定め其の命中甚だ確實に候尤も彈丸は大なる鉛彈なるも中には釘様の物を以て能く致命傷を負はせ從つて我軍の負傷中の死亡比例は日清日露の如き戰爭の比にあらず約四〇%に有之候又傷部も頭部軀幹にあり從つて内臟損傷甚だ多く御座候抑も本年は生蕃中の最も頑強なるガオガン蕃を歸順せしむるにありて新竹方面はマリコアン蕃と連絡し常に我前進を阻害致し居り候乍然我勇敢なる兵は進んで退かず着々前進し今やガオガン、マリコアンの蕃屋に接近致候へば蕃族の妻子は大に恐怖し彼等の家族の愛情は自然歸順するの已むなきに至り漸く歸順の色見ゆ前進も稍々容易に相成候然れば最早や數旬あらずして討蕃の終結を告げ凱旋致すべく候。當地方は全くの不毛高山にして檜樫の

巨樹繁忙し清風颯々殆んど暑氣を覺たたる事なく却つて朝夕の冷涼なる事當季に於ては内地に於ても得まじき仙境に御座候然れ共先月下旬來は雨季とも稱すべく毎日の様に降雨し山にり後方の輸送等は甚だ困難致居候故に討蕃中は容易に好味の物口に入らず候斯く蕃山に侵入致しては惡疫殊に傳染病の如きはあるべき筈なく唯往々にして輸送の苦力(本島人)が病原を持出來すのみ此の点に對しても小官等の任重く衛生には怠なく候戰爭中は頗る繁多の如きも無稽に前進するものに無之候へば一回の前進行動毎に露營地を定め次回の前進準備する迄に多少の旬日を要するものなれば討蕃中も雖も案外の讀書の時暇有之候殊に當山中の氣候は不暑不寒内地で形容すれば新緑滴る候とも稱すべき頃候へば甚だ陽氣の感有之候徒然ある儘に餘白の盡きる迄蕃公に就き斷片認め候

一、蕃公の生活は頗る單純にして其風俗等は蕃族により大に異なるものあり當方面のガオガン、マクコアン等はアタイアル種族にして蕃公自身も然云ふ然し「アタイアル」とは人の意義ある由、彼等の言葉の音調は東洋人には耳新らしく感ぜられる「アクセント」あり語韻頗る輕く恰も英語か佛語を聞く心地せらる食物は粟、稗、米、麥等を食し「バケツ」の如きものを以つて之れを飯さふし手つかみにして喰ふ其副食物は山椒、唐椒の如き辛烈なる物の液汁を水に加へて飲む計りにて乳兒の頃より尙之を與ふ故に「アルコール」類は最も嗜み六〇%位の「アルコール」は好んで飲む

一、蕃公の遠征する際は餅の如きものを援行す戰友にして戰死等すれば其屍体は頭部四肢、軀幹等を分解持去る様子にて其收容頗る輕便と稱すべし

一、蕃公の動作を見て我等は猿の如しと見たるに近頃馴順したる生蕃の頭目は我兵の動作亦猿の如しと云へり

一、彼等は我兵卒の勇敢に彈丸を恐れざる動作に感じて曰はく兵卒の親は戰死せるを聞きて泣かさるかさ即ち生蕃は家族的愛護の精神に富み生蕃

にして戰死するものあらば一家悉く三日間は慟哭して止まずと云ふ今回の銃傷に就ては臺北に歸營後可及的研究致し度き存念に候處尙は御參考共相成るものあらば十全會誌に寄稿致す可く候尙上記々載の中同會員諸君に御傳達下さるも不答候、乍末山崎、佐々木、宮田、村上、松原諸先生へ宜敷御風聲願上候先は右迄敬具

●韓清泉、湯爾和兩兄通信

(松原教授宛)

謹啓小生等十九日神戸塔船航海中至極靜穩朝より夜深迄甲板上にO₂を無料にて呼吸すると五日間低氣壓の不變來は仲々御陰様と存じ候一昨日無事歸郷致候間乍慮外御休神被下度候扱て御地滞在の砌は色々御厄介に預り御禮は言辭に盡難候尙出發の節は雨天にも不係遠路見送被下當日瀛車矢の如く停車場を駛出したる際に尙我が親愛ある同窓より大聲にて萬歳の歡送を意外に受けたると驚喜之至に堪へず候誠に難有御禮申上候歸院の後今日より再び例の如く勞働場上に立つとと相成候へ共も病院は經過良好にして一般にも格別惡疫流行病發生座御座候聊か御同悦に御座候先は右報のみ餘は後便に可申候恐惶百拜

宣統三年七月五日

門下

韓清泉
湯爾和

松原先生 這履

貴科諸君一同大賀

●神戸通信

(淺利義治氏發松原教授宛)

時下酷暑の砌會員御一同様御勇健の段奉賀候當地同窓一同無事御放神被成

下度候扱て山碕先生六月初旬來露嶺及滿韓地方の醫事衛生教育等の事業御視察中の所計らざりき今固御歸途七月十日當地へ御立寄の好機を利用し先生の御多忙中且御疲勞をも不顧補公社内一茶亭に御噴臨の光榮を得久々先生の溫容に接し豐富なる御土談且色御々高説を拜聽し夜の更くるを知らざりしは近頃ふき快事にて一同喜悅の至に存じ唯先生の旅情を慰むるを得ざりしは實に遺憾の次第に御座候貴院眼科に研究中よりし浦井紳一郎君今回當地川崎造船所醫務室眼科主任として御來任終に會員一同の健康を祈る

●名取博三氏通信

(福田美明氏宛)

秋尚暑く候へ共御勇健之段奉大賀候小生幸に無事消光罷在候(中略)當大學も御承知の通り來春には本年十一月の卒業生が出勤仕り随分雜踏致す事と存候殊に本年の卒業生は内科志望者多數の由聞及候、充分の研究は少人數の時こそ宜しく候、大兄も其後「アルバイト」は如何に御座候や小生は不相變に御座候小生等と同窓の大原君は不相變盛に御座候小田君も一年志願兵後故里に開業大に發展致し居らるゝ由に候梶川君によりしく、御繪端書有難拜見母校の時代思ひ出され候

名取氏は四十一年卒業後梶川、杉下、藤崎、予と共に山碕先生の下に研究に従事し翌年五月京大法醫科に轉じ今尙熱心に研究學事に盡されつゝある人あり。(福田生記)

* * * * *

外國雜報

●黑國に於ける本邦醫師

在墨西哥駐紮堀口臨時代理公使より外務省への報告によれば、同國に於ける本邦醫師の開業は頗る有望にして、且つ手續等も左の如く意外に簡單あり。合衆國に於て吾移民が拒絶せらるゝより、近年南米に轉ずるもの劇増し來りし今日、本邦醫師又此方面に着眼するを要せずや。

在墨西哥堀口代理公使より外務省への報告

墨西哥共和國は主義として、醫術自由開業を認む、即ち墨國免許醫たるを否を問はず、自由に醫業に従事する事を得。由て本邦醫師にして當墨西哥國に於て、醫術開業をふさん欲せば、必ずしも當國政府より開業免許を得るの必要なし、然らば免許醫と無免許醫との差如何ん云ふに、免許を得ざる醫師は醫業に關する證書、例へば死亡證書又は診斷書等を發すに雖も、右は墨國法上何等効力を有せざること、又其の誤診より生ずる結果は、法律上普通人と同等に取り扱はるゝとにあり、以上は當國內務省衛生局長の談話)而して其の實際に付て之を觀るに、當墨西哥に於て外國醫殊に米國醫師にして免許を得ずして開業し居る者頗る多しとす。

以上は當國に於ける無免許開業醫に關する事あるが、今觀て外國醫にして、墨西哥に於て開業免許を得んと欲するものに關して之を視るに、當國に於ては歐洲諸國と同じく、大學卒業免許其の物が開業醫たるの資格を代表するものにして、日本に於けるが如く、特種の私立學校又は其の

他の方法によりて、醫學を習得し、内務省の試験を経て醫師とあるの特
別制度なく、又或る條約國の醫師(西班牙醫師の如き)の外、墨西哥醫
として醫術開業をなすを得ざるを以て、墨西哥に於て免許開業醫として開
業するには、墨西哥國醫とあるを要す、而して外國醫にして、墨西哥國
醫たらんと欲するものは、墨西哥文部大臣に宛て願書を提出し、これに卒
業證書并に修業科目證書を添付すべし。然る時は、文部大臣之を醫科大
學試験委員會に移して審査せしむ而して其の審査の結果、委員會は、西
班牙語にて、或は單に論文試験をなし、或は一部の學術試験を兼ねて之
を行ひ、及第したる者には墨西哥醫(ドクトル、エン、メデイシナ)の稱
號を附與し、共和國内何れに於ても開業する事を得、今右に關する當館
の照會に對し、當國文部省専門學務局長よりの回答書と共に送り越した
る「メンモランダム」を左に譯出して、當該者の參照に資す。

醫科大學々業規則第二十五條に「共和國の他の官立醫學校又は、外國
大學に於て醫師たるの稱號を得たるものにして墨西哥醫科大學に於て
醫師の稱號を得んと欲する者は、現行醫科大學々業規則の規定する科
目に就き、同校學生と同じく一々試験を受け、尙ほ論文を提出するを
要す、然れども其の既に修業したる科目が墨西哥醫科大學に於て修業
すると同等の程度に於て修業したるものには、再度試験をなすの必要
なしと認められ、從て墨西哥に於て効力ありと史料せられたる科目に
就ては、特に試験するを要せず」
とあり。故に外國醫が墨西哥醫科大學に於て、醫師たらんと欲するに
は、願書に其本國の公使又は領事の證明を経たる卒業證書并に、修業
科目證書を添付し、之を文部大臣に提出すべし。

醫科大學長は、前項の書類を審査し、出願人の學業が、墨西哥法の要
する學業と同等ありと認めたる時は、墨西哥法の規定に従ひ、論文を
提出せしむ、然れども其の學業を同等ありと認めざる時は、五人の教

授より成る試験委員會をして同人に對し醫學一般試験を行はしむ、而
して此の一般試験は筆記試験。口述試験。及び實地試験の三よりお
る。

若し出願人が前記の審査に於て、墨西哥法の要求すると同等ある學業
を修得せざるものと認めたる時は、醫科大學修業科目毎科に付き、試
驗をなし及第したる者は、其の後醫學一般試験并に論文試験に應ずる
事を得せしむ。

要するに、本邦政府の醫術開業免狀を所持せるものは、詮衡の上無試験若
は或る二三の簡易ある試験にて開業を許可するあり。而て同國に於ける本
邦勞働者其他の移民は、年を逐ふて増加し、去千九百七年(四十年)には、
千六百人内外ありしが、四十二年には二千四百六十五人に達し、昨四十三年
に至りては益増加し三千三百五十八人に達し、此内醫師は千九百七年即
ち四十年には僅に九人なりしが、昨四十二年には十七人、此他女醫二名あ
り、本年は愈増加し、去六月迄に同地に於て新に開業せし者四名を増し、
即ち二十一名の開業醫とありたり。而て之等は全部無試験若は代理試験
(通譯試験)によりて許可せられたるものあり。邦人中此他殆ど無籍同様
ある職業婦は常に七八百名より千名内外を出入し居り、此他支那人歐洲人
等にして、受診者あり、故に將來同地に於て開業せんとするものは、多少
英語の素養あるものあらば前途非常に有望ありと、本邦醫師の多く開業し
居れるは左の四市ありと。(醫海時報抄)

- 一、メキシコ
- 一、モンテレイ
- 一、パウエブラ
- 一、パチュユカ

●露國の醫師缺乏

露國に於ては首都ペーテルスブルク醫科大學は別として他の大學に於ては

教授拂底し多大の困難を極めつゝありと云ふ、文部省は教授候補者として留學生を伯林、ライプツヒ、ハイデルベルヒ、巴里等に送るも斯くの如くして作れる教授の數は多からず、是れ畢竟するに、露國に於ては醫科の學生は多くは貧困者ふると、或は既に結婚せるもの多くして卒業後引續き學事に従ふもの少き爲めなり。即ち生存競争の爲め、卒業すれば直ちに開業して衣食に奔走せざるべからざるが爲めなりと云ふ、然のみならず露國に於ける醫學生の數は漸々減退しつゝあり、即ち九百十年の公報によれば醫師の數は一萬七千八百四十七人の男醫と一千百三十四人の女醫とあり、人口八千人に付醫師一人の割合と云ふ、之れを佛國の人口二千六百三十人に付醫師一人、英國の千七百三十人に付醫師一人、に比すれば醫師の數は非常に少ふし、殊にサイベリヤの如きは人口一萬五千二百人に付醫師一人コーカサス地方は人口二萬人に付醫師一人の割合なり、之を歐洲露西亞のみに就て考ふるも、人口七千三百人に付醫師一人あり、斯くの如く醫師の不足しつるにも拘らず、醫學生の數は年々減少しつゝあるあり、即ち千八百九十八年には醫科大學に九百四十人、軍醫學校に百三十八人の學生ありしが、千九百七年には上者に六百九十四人、後者に百四人の學生あるのみと云ふ。斯くの如くして大市街地には敢て醫師の不足を見ざるも、地方に至りては其慘狀意想外あり、殊に南露に於ては、「コレラ」其他の惡疫年々流行するも醫師缺乏の爲め豫防の法も行はれず、其蔓延に任かせつゝありと、却說露國が斯くの如く醫師の缺乏を告げ、醫學生の減退を來たす原因を以て、識者は政事及社會組織の不良に歸し居れり。

● 米國の看護談

左の一篇は、疊に看護婦制度其他視察の爲め、歐米に派遣され此程所期の視察を了へ歸朝せし、日本赤十字社看護婦周防女史が先頃内務省地方局に

於て述べたる其の視察中の、米國に於ける、看護婦事業の一斑にして、此種事業は早晚本邦に於ても、亦必ず企圖せらるべきを信じ、茲に其の大意を抄記す。(醫海時報抄)

▲看護婦會經營の學校、これは幼稚園より中學迄の教育をふす諸機關を完備し、教師は醫師と看護婦大部分を占め、主として學童の健康狀態に注意し、疾病者ある時は、直ちに本部に報告して適宜の加療を施し居れり。

▲親の會と子供の會、看護婦會の本部は受持區域を定め、常々見廻看護婦を派出し、各家庭の母を訪問し家庭衛生萬般の注意、教訓、掃除、洗濯、裁縫、沐浴及毎月一又は二回母親會を設け衛生講話を爲し、相互親善を保つ事、其他母が勞働者にして小兒の爲め妨げらるゝ場合は、夫等の家庭の子供を收容保育すべき「シスターホーム」あり、「ホーム」は看護婦管理し、一週一二回醫師來診し、勞働を終へて家に歸る母親は子供を受取り嬉々として歸り行く有様誠に平和の權化あり。

▲組育の「シスターホーム」、組育はさすがに大都にして此の如き事業の發達も他に比し進歩し居り「シスターホーム」も五ヶ町に一ヶ所位の割合に設立され居り預けられたる兒童は夫々幼稚園又は小學校と學齡に應じ登校せしめ、教師は前陳の醫師看護婦又は特志教育家等之を擔當し居れり。

▲「ホーム」の預料、本來の目的は慈善なるが故に必ずしも一定の預料を徴せざるも多くの母は薄暮勞働の歸るさ其の日の勞銀中より一兒に付き二錢又は三錢或は五錢を寄附するを常とす、此の寄附金は總て貧者救済の資に投せらるゝあり。

▲見廻看護婦、毎日午前七時半を期し、所屬の本部に集合し夫々見廻方面の指圖を俟ち各科治療材料を携へ新患者ある場合は醫師の治療を受け居るや否やを實し或は醫師を伴ひ來り又は診を乞はしめ、注意事項を指示し時を定めて見廻り看護の任を全ふするあり。

▲一日の見廻二十軒、二十患者を歴訪するは決して容易の業にあらざるも

靜養室と病院船 傳染病中の呼吸器病は、大底萬障を排せしめて直ちに之れを樹木多き場所に設けられたる靜養室に收容し、能はざる場合は之之を病院船に收容し全く塵芥境と隔絶せしめ療養上遺憾なきを期し居れり。病院は多く三階造りにして常に醫師看護婦により慰安と療養に努め居る。午前七時患者を船に集め沖合に船を進め孤島に上陸せしめ夕方六時に歸岸容體により各自の家に歸らしめ又は船に止め、斯くの如き場合は總て衣服の如き救濟會又は看護婦會本部より一定のものを貸與し居れるなり。

▲三四才の小兒患者 病院船又は靜養林等には比較的病機の進行せるものある事故。病幼兒と同所に收容するは危險に付き別に幼兒を收容する爲めには保養院の設けあり、貴女紳士連は誕生會又は略し得べき結婚葬祭費を節して之に寄附し田園部落を興し十才以下は父兄を附し適宜運動等を爲さしめ附添の親達は又看護婦と共に平素の衛生上に付ての講義を聴き退院後は一通りの看護を爲し得るに至るを常とす。又十才以上十四才の兒童には可成一般健康兒と學藝其他の進歩に遅れざらしめん爲め特に教育し女子ふらば家庭上に必要ある學科を習得せしめつゝあり。

看護婦會の維持法　主として一般篤志家富豪の寄附金、教會の補助金、看護婦會の維持法　主として一般篤志家富豪の寄附金、教會の補助金、
又篤志家の物品器具の寄附、假令應接室は誰廚房は誰、食堂、寢具は誰と様に或は看護婦幾人分の給料は誰と夫々寄附の方法も異なるるを

▲一週二又は三日休暇 如此責任ある職務に従事せる彼等に對しては、一週より三日位迄の休暇を與へ休暇中は勿論報給を與ふるあり、成績良好の者には一年三週間迄の特別休暇を與へ居れり。

▲千二百の見廻看護婦 本事業は年次増加し現今有名なるもの十二團あり申にも「ミツヌウオーレル」經營のもの最も有名あり、而て組育に於ては目下是等の各團體に所屬する見廻看護婦千二百餘名を算す。

北米及び米領諸島に於ける賣藥則ち特許藥の販賣は極めて自由にして特許藥の販賣免許稅一ヶ年五弗を仕拂ふ時は何人なりとも亦如何なる商店例へば其「グロサリー」たるを將た「デパートメントストア」たるを問はず之を販賣することを得るも劇毒藥の販賣及普通藥の零賣は米國藥劑師免許狀を有するものか若くは藥劑師をして其主任ならしむるに非ざれば之を爲すことを得ず、昨年春「シヤアトル」に於て大阪府人〇〇〇〇あるもの本邦賣藥の販賣を主とし傍ら各種藥品を取扱居りたる處當該米國官憲は藥種商を營み居るものさし藥劑師を雇入るゝか然らずんば其店舖を閉鎖すべきを命じたり、然れども上述の如く本邦賣藥即ち特許藥の販賣に關しては何人なりとも特許販賣免許稅五弗を納付するに於ては容易に之を成すを得べく從

來同地に輸入せられたる本邦賣藥中今日迄未だ何等發賣を禁止せられたるものなきも米の國法として特許藥には其含有せる成分を丸藥は其一粒中に水藥は茶匙一杯中に含有する混合藥品の分量を「ゲレーン」を以て明示せざる可からず、然るに本邦賣藥には何等這般の表示を缺如せるが故に需用者に於て不便を感じる場合少からず、此の故に同地に於ける取扱商店より製劑本舗へ含有藥品の分量明示方を交渉したる結果或る種のものには之を表示して送る向あるも素々米國方面に輸入する本邦賣藥の數量の如き極めて些額に過ぎざるが爲めあるべきが製劑本舗に於ては此點に關し深く注意を拂はざるに似たり、且又米國法の規定により其含有藥品量を明示し來れるものに在りても「ゲレーン」に依らず「グラム」を以て表示し來れるのみならず衛生試驗所に於て分析の結果は著しき相違を見るを例とす、尤も當地衛生試驗所に在りても賣藥製造の狀態を知るに於て必ずしも一粒中に當然含有すべき混合藥品の分量を每粒中に正確に含有せしむるもの困難なるは之を認むるに躊躇せざるも而かも其差餘りに甚だしくして殆んど含有藥品分量表示の詐偽に類するものがあるが如きに愕く場合ありと云ふ、勿論衛生試驗所に於て多忙に際しては一々本邦輸入の賣藥に對し嚴格なる検査をなさずして簡易ならしめんと欲せば米國法に據り其含有藥品分量を「ゲレーン」を以て明示すると共に其明示の可成正鵠を失はざる様留意するの要ありと云ふべし

又本邦賣藥の通例として萬病に利くが如く効能書を附しつゝあるも米國に於ては斷じて之を許さず又之を服用するに於て何々病を全治す云ふが如き文字を記すを許さず、其理由は凡う一藥にして本邦賣藥に記しあるが如き萬病に効あるものなく又何ある藥と雖も之を用ゆるに於ては何病に効ありと云ふを得べきも之を全治する云ふを得ず即ち本邦賣藥中其包裝等に若し英文にて此の如き効能を記するに於ては之を抹削するか若くは其上に白紙を貼りて讀むこと能はざらしむるに非ざれば販賣を許さず云々此程

在米商務官より報告ありたる由。(藥石新報抄)

* * * * *

内地雜報

●東西藥種商比較

近刊帝國新聞は「財界より見たる大阪と東京」と題する記事で藥種商の對比に就て左の如く記せり

藥業上に於ける大阪の地位日露戰前六と四は今八と二
營業稅より見たる藥種商の取組大關關脇小結と幕内の實力比較

其他工業上の比較要するに日本工業の横綱は大阪あり
工業藥、醫藥に於ける大阪は巨然東京との比に非ず日露戰前大阪六東京四の割合ありしも、今は大阪八、東京二の割合とされり今東西藥種商の納むる營業稅に依て比較せん

▲大阪

▲東京

二、三八二	武田長兵衛	一、〇八三	小西安兵衛
一、七三二	田邊五兵衛	七六五	島原吉兵衛
一、〇八五	柳原三郎	六五〇	平野郁三郎
八五三	春元樽之助	六三〇	中村瀧次郎
七六六	小西儀助	六二六	松本市左衛門
七五一	鹽野義三郎	四八〇	淺野惣三郎

七四八 大井卜新 四六〇 田邊元三郎
 五五五 菅井豐藏 四一〇 小西新兵衛
 五三五 春元竹三郎 三二四 島田武兵衛
 五〇九 小野市兵衛 一六三 小西宗七

(註)大阪に岩井勝次郎(二、一一三)島定次郎(一、八七五)の兩有力者あれと其他の事業に關係あり省く

大阪の武田長兵衛と東京の小西安兵衛兩氏は東西の大關たり而かも其實力に至りて東京は大阪の四割六分より其他最後の小野市兵衛、小西宗七兩氏の比較は三分の一に降れり以上大關關脇小結幕内十名の比較に於て平均一名當り税額大阪の九百九十一圓に對し東京五百五十七圓の相違あり況んや東京十名の有力者中淺野總三郎氏は惣野義三郎氏、田邊元三郎氏は田邊五兵衛氏、小西新兵衛氏は武田長兵衛氏の出張店ふるに於ておや此外賣藥商として比較すべきあれど商業の部に讓る云々

●同賣藥小賣商比較

次て其の續稿中東西賣藥業に就き左の如く記せり

小賣業に於ける大阪の地位賣藥業に於ける東西の消長
 事業不熱心にあらず覺醒せざるなり今は覺醒の時期に達したり
 無頓著の小賣業も今後競争の激甚に内外の壓迫を受く
 大阪に於ける小賣業者の將來如何發展の見込なきものありや否や之を研究するに先ち賣藥業に就て説く所ある可らず四十四年度各稅務監督局管内に於ける賣藥税を見るに如左

	税 額	貼用印紙
京都局	四二、七四六圓	五二〇、八一四圓
大阪局	三五、〇三九	四六八、七八〇

(内地雜報)

東京局 三一、〇〇九 三四〇、〇八八
 熊本局 二八、四〇八 一二四、九八七
 廣島局 二三、八四九 八七、六九二
 富山を含める京都局の最多あるは當然ながら之に次て大阪局は東京局の上にあり即ち貼用印紙に於て十二萬八千六百九十二圓の多く實に二割七分の多額を占む此事實は要するに賣藥業に於て關東以上あるを語らずや今東西賣藥業の主要者を擧げんか

大 阪	東 京
仁 丹 (森 下)	中將湯 (津村)
健腦丸 (丹 平)	腦 丸 (山崎)
大學目藥 (田 口)	精 錫 水 (岸田)
清快丸 (高 橋)	清 心 丹 (高木)
胃 活 (山 田)	胃 散 (太田)
次亞 燐 (小 西)	淺 田 飴 (堀内)
ビットル散 (猪 飼)	五 臟 圓 (大木)
ドクトリ丸 (本 林)	寶 丹 (守田)
指 藥 (中 井)	レーベン (中南)

仁丹に至りては其發展目醒ましきあり賣藥界のレコードを破りたるものあるが此外健腦丸、大學目藥胃活、次亞燐等皆其の名を走す之に對して關東の中將湯淺田飴の最近活動の見るべきあれど清心丹ゼム(山崎愛國堂)寶丹等は仁丹と比して多少の遜色あり胃散亦胃活に驅立てられ精錫水は大學目藥の前に顔色あき状態にして健腦丸を知れど腦丸を知るもの少し既に賣藥業に斯の發展あり其他の小賣商亦何ぞ賣藥伸展の如き無き能はざるの理ある之を人口の密度に見又之を富の程度に見更に消費力に見て大阪小賣藥の東京に一步を輸する所以ふきを知るべし云々

●島根縣諸學校の生徒腸寄生虫 蠱に茨城縣外一二地方廳に於て管下各種學校生徒の腸管寄生虫の検査成績を發表したりしが今又島根縣管下各學校生徒等五千六百八名に就き去月五日より同廿五日迄同縣細菌検査所に於て屎便鏡檢の結果は如左

校名	人員	十二指	百分	腸蟲	百分	鞭蟲	百分	條蟲	百分
師範	三五	〇	三、〇八	三	九、〇八	六	一八、〇八	二	〇、六
中學	四九	六	三、七四	一〇四	二、〇一	五	一〇、〇	一	〇、〇
高等	二八	元	〇、三	九	二四、五	二	八、五	〇	〇
女學	二二	元	〇、三	九	二四、五	二	八、五	〇	〇
農林	二二	四	一、九七	七	三、〇七	一	六、〇	〇	〇
商業	二四	二	八、六	四	一八、五	三	二、三〇	四	一、五
工業	二〇	元	一、五、全	七	三、〇八	二	一〇、〇	〇	〇
市立女	四	七	七、〇七	六	一四、五	五	二、〇	〇	〇
子技藝	四	七	七、〇七	六	一四、五	五	二、〇	〇	〇
小學	三七	元	七、九	六	二六、八	二	七、九	〇	〇
高等	四	元	六、四	三	一四、八	二	三、五	〇	〇
北堀	四	元	六、四	三	一四、八	二	三、五	〇	〇
尋常	四	元	六、四	三	一四、八	二	三、五	〇	〇
母衣	四	元	六、四	三	一四、八	二	三、五	〇	〇
內中	四	元	六、四	三	一四、八	二	三、五	〇	〇
原同	四	元	六、四	三	一四、八	二	三、五	〇	〇
白濁	四	元	六、四	三	一四、八	二	三、五	〇	〇
雜質	四	元	六、四	三	一四、八	二	三、五	〇	〇
師範附	四	元	六、四	三	一四、八	二	三、五	〇	〇
屬小學	四	元	六、四	三	一四、八	二	三、五	〇	〇
幼稚園	四	元	六、四	三	一四、八	二	三、五	〇	〇
計	五、六八	五	九、七	一〇、一	一八、〇五	三六	六、四	二一	〇、七

●新醫學博士 七月二十五日豫て論文提出中の八木田九一、佐藤恒二の二氏に醫學博士の學位を授與せられたり、兩氏の簡歷及論文題目左の如し。

▲八木田九一 氏

氏は大阪府平民にして明治十年に生る、去る明治三十七年大阪高等醫學校を卒業し、岡山醫學專門學校教授上阪博士の助手を爲り、幾何も無くして同校講師を囑託せられ、更に助教に擧げられ、進て教授の榮職に就き、今實に解剖學組織學講座を擔任せり。氏が今回提出せる論文の題目左の如し。

一、唾液の中樞に就ての追加研究(獨逸文)

二、一側の索狀體を破潰したる後に生ずる延髓の變化竝に側索核の解剖所見増補(獨逸文)

三、顔面神經核の試験的研究(獨逸文)

四、唾液分泌の中樞に就て(獨逸文)(羽山周五郎合著)

四、心臟迷走神經の起首に就て(上阪熊勝合著)

六、肺臟迷走神經の起首に就て(獨逸文)

七、迷走神經起首及節狀神經節に起る知覺纖維の中樞終末並に其第二徑路の走行に就ての試験的研究(豫報)(獨逸文)(上阪熊勝合著)

八、舌下神經及其下降枝の起首に關する試験的研究(上阪熊勝合著)

▲佐藤恒二 氏

氏は明治十一年長野縣に生れ、養はれて千葉縣佐倉の名家佐藤舜海の嗣子となる、明治三十七年千葉醫學專門學校を卒業し、獨逸國に留學すること二年、歸來養父を助けて佐倉順天堂病院の副院長を爲り、診察治療の傍ら斯學の研究に努めつゝあり。氏の提出したる論文題目左の如し。

一、大便中に存する黴菌量の測定法(獨逸文及邦文)

二、「ツベルクリン」内服による結核診斷法に就て(獨逸文)

三、大便の比重測定法(邦文)

四、人類腦の「チスツェルケン」に就て(獨逸文)

五、四歳の小兒に來れる特種稀有なる神經細胞變化を伴へる脊髓變性の

一例に就き(獨逸文)

六、胃腸症(神經性胃蠕動不穩症)の一例(邦文)(井上文哉共著)

七、土屋氏蛋白計とエスバツハ氏蛋白計との實地上效果に關する比較研究(邦文)(矢崎高共著)

八、膽汁の醫療的應用に就て(獨逸文並邦文)(井上善次郎共著)

●博士の現在數 醫學博士數は年々増加し來りて四十三年中に學位

を授與されたる者十三名ありしが、本年は七月三十一日迄に已に二十名に達し本年は少くも三十名の新博士を出すに至るべし、盛ふりと云ふべし、因に目下三醫科大學の教授會へ學位を要求せるは五十餘名にして此内東京醫科大學へ五分の四、京都福岡兩大學にて五分の一の割合ふと、而して現在醫學博士數は二百十四名あり。

●醫師と賣藥

近刊の東朝紙上「東京の警察」と題して連載して居る中に左の一項がある

▲醫藥營業者 醫藥に關係のある營業者は市内のみで醫師二千四百三十三、齒科醫二百六十、藥劑師五百四十六、獸醫七十一、産婆一千三百八十七、製藥者百九十一、藥種商一千二百七、整骨業十五、入齒齒拔六十一、鍼灸術九百廿七とありて催眠術等の心理療法は入つて居ないが四十四年度には調査して貰ひ度い、玆に詳論したいのは醫師と産婆である東京全市の人口を醫師の數で除すると三百三十六ある商數を得る即ち市内では一醫師の受持平均人口は六百卅六人にあつて百數十戸の家族を療治する譯にある、東京の醫師が衣食に窮して居るは全く此平均數が過少であるからである、又産婆の平均受持は婦人五百三十一に當るが是は醫師より尙割が悪い、産をする婦人は全婦人の十が一にも足らぬ即ち平均數の

(醫校雜報)

十分の一さへ手に掛けるとは出来まいからである、産婆墮落の聲日々に耳に入るは産婆業のみでは生計を立てるとが出来ぬ故自然妙ふ事に手を出す譯に依るのだ夫れが郡部にあると多少平均が都合よくあつて醫師一人につき一千八百十七人、産婆一人につき一千五百十九の婦人である、而して市内で醫師の最も多いのは日本橋の二百八十六で産婆も日本橋の百七十八である次で忘れてからぬは賣藥のこゝである、市内賣藥營業者は二千三百二十二で賣藥請賣業は七千二百二十六である醫師の數も産婆の數も是に對しては顔色が悪い東京人の病氣は醫藥によりて治療さるゝよりか靈丹賣藥に依りつゝある傾向が能く見える。

* * * * *

醫校雜報

●各所の新事業

▲金澤醫專校改築費

十六萬餘圓

金澤醫專校は改築費三十餘萬圓を一昨年度要求する筈ありしが、都合上豫算を二分し、一昨年度は其半額即ち十六萬餘圓の支出を得、改築に着手し、既に其部分丈けの工事は今年中に竣りを告げ、其殘餘の半額は本年度に要求する筈ありしも、工事及豫算の都合上明年度に延期したるあり、若し明年度に此の豫算の成立せざる場合には、工事の都合上非常の大損耗を來すのみ、同校の教務上にも差障を來す可きを以つて、該豫算も無事通過す

四

(校内雜報)

べしといふ。

▲新潟醫專校州屬病院改築費

八萬餘圓

新潟醫專校は、新潟縣が其の病院と學校の土地を寄附すとの條件にて創設されり、却說文部省が同縣立病院を受取つて見れば、直ちに改築を要するものたりしあり、事實病院は用に堪へざるに一方學校は既に開校せし事とて如何ともす可らず、遂ひに本年度に於て追加豫算として一部の改築費を要求し、病室二棟を改築せしが、尙ほ明年度よりは殘部即ち大部分の改築に取掛らざる可らず、即ち八萬餘圓を要求する事とあり。

▲醫化學教室設備費

二萬餘圓

各官立醫學校へ明年度より新設する醫化學講座教室設備費は、一校約四千餘圓、五校にて合計二萬餘圓を要する筈あるが、コハ既に數年來の宿題にして十分に研究され調査されし揚句の事あれば、臨時費として要求し無論通過するに相違おしき。(醫海時報抄)

* * * * *

校内雜報

●劍道大會記事 (三月五日)

四拾四年三月五日濟々堂に於て劍道大會を開く當日寒稽古皆勸證書及進級証書を授與せられしもの次の如し

▲寒稽古精勤者

大武 國治 池上 豐 舘 昌次

▲寒稽古皆勤者

北村 清太郎 寬 永義長 松江 幸行

穴田 留八 砂川 茂男 鹿野 重太郎

生橋 一 郎 三 輪 穰 小 森 定司

布施 宗 一 村 山 瓦 平 窪田 他作

柴田 一 男 志 村 達 雄 毛 利 清藏

岩崎 省 三 原 田 貞 治 涌 井 正雄

前川 孝 之 佐々木 文 三 舘 昌 次

吉田 一 郎 池 上 豐 大武 國治

末岡 愛 一 太 田 彦 八 辻 金 二

磯部 佐 外 高 橋 秀 三 澤 村 恒 松

森田 次 郎 藤 田 研 二 中 林 清右衛門

伊藤 磨他雄 久 米 川 虎 八 小 林 辰之助

▲進級者 人名

北村 清太郎 辻 金 二

右二級に昇進 窪 田 他 作

佐々木 文 三

右三級に昇進 松 江 常 行

吉田 一 郎

右四級に昇進 砂 川 茂 男

野村 義 章

高倉 外次郎

示澤 喜久男

岩崎 省 三

鹿野 重太郎

宮 田 寮

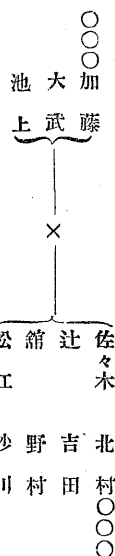
右五級に昇進

▲各學校官署撰手對本校撰手勝負

久米川 虎 八
布施 宗 一

○○(都賀田勇馬(王))
 ○○(高倉外次郎(真商))
 ○○(戸水 真郎)
 ×○○(岡田喜良(二中))
 ○○(久米川金虎八治(二中))
 ○○(多田金治(二中))
 ○○(田中孝茂(二中))
 ○○(寬永義長(一中))
 ○○(土田勘次郎(一中))
 ○○(北村清太郎(一中))
 ○○(橋爪源次郎(一中))
 ○○(西野勝藏(小中))
 ○○(田中勝郎(小中))
 ○○(佐々木友直(小中))
 ○○(吉田友直(小中))
 ×○○(辻金二(師))
 ○○(寺尾兵右衛門(師))
 ○○(窪田他作(廣(四高)))
 ○○(根布貞吉(四高))
 ○○(時枝 薰(四高))
 ○○(館田欽之助(四高))
 ○○(持田欽之助(四高))
 ○○(稻葉末吉(四高))
 ○○(稻葉末吉(四高))
 ○○(北村清太郎(雄(磐)))
 ○○(德田毗雄(磐))
 ○○(北野榮藏(監))
 ○○(杉村鍋太郎(監))

四九



右加藤、北村

銀牌各一個宛授與

茶話會(會費拾錢)於濟々堂

出席者如左

阿部部長

佐復理事

北村師範

末岡

西岡

伊藤

太田彦

北村

久米川

小林

田尻

砂川

宮田委員

野村

太田潔

池上

吉田

源明

(卒)縮委員

北村

佐々木委員

(卒)加藤

(卒)大武委員

辻委員

北野

寛永

松江

(以上)

附記

本日の茶話會は劍道部有志本學年最終の會合なるを以て本年卒業す可き四氏の送別會をも兼ね行ふ、爲めに辻氏、大武氏、及池上氏の辞あり
餘興に詩吟、琵琶歌、劍舞、
閉會同五時半

●新入會員を迎ふ

本年の選拔試験に合格して入學の榮を得られたる諸氏は左記の如くにして
去九月十一日本校濟々堂に於て入學式と宣誓式とを擧げ高安校長と阿部生

徒監との訓示ありたり。吾人は茲に精氣に充ちたる新進の新入會員を得たるを悦び。諸君が學術の研究のみに止らず。尙ほ進んで人格の修養を專一として方今一般學生の模範とあらんことを切望して止まず

醫學科第一學年

今越理作	中本覺二	岡本敬三
岡本規矩男	春野重二	黒木彌一
早藤市郎	桐田健三郎	北村米三郎
牧眞武	宮森基	松井源次
熊木勸治	加藤鉦一郎	牧野知孝
稻田稔郎	内田茂吉	大谷顯治
後藤鈴松	松井利市郎	古村良久
眞下誠	本多隆元	眞下信一郎
西業求	喜多村虎次	小堀茂雄
稻垣豐三郎	鈴木信友	新居厚
唐澤健一	入山義臣	小川退三
淺地茂孝	湯淺富三郎	鈴木守義
高橋甚一	鈴木外男	大川茂作
倉田英一	石原巖	武安五郎
神内甚六	野手雅信	仲谷實
今井德藏	保坂誠吾	篠原於菟
内藤榮治	大前發次	岡村一男
園梯次郎	能木場與三郎	水越國治
野々村順耳	川岸孫一郎	國部久一郎
森本捨三	子安頼義	小林春平
中村周三	松田外次郎	井上行義
田中清次	布瀬七一郎	中會根包吉

藥學科第一學年

增田 悅	越澤 龍	小杉 時雄
石崎 治郎	牧野 岩太郎	滿田 昇
北 弘	落合 茂利	古川 省三
田中海 五郎	栖田 衛治	今井 大三郎
傳田 昶	杉浦 寅雄	額谷 仁作
本江 慶太郎	井手 永一	青山 太郎
山崎 俊菊	橋 進之丞	安田 忠雄
三輪 春太郎	大城 喜太郎	朝賀 政雄
中條 隆之助	菅井 景治	原田 守雄
山本 堅藏	牧野 米之助	時國 恒夫
杉本 靜一郎	北外 佐太郎	佐野 悅二
吉田 憲吉		
藤井 省三郎	水埜 文平	三戸 晴壽
若井 繁二	柴田 健兒	高濱 吉次郎
安藤 謙治	吉浦 仙次郎	福田 力松
田口 英一	森 敬三	久本 榮治
黒木 義勝	堀川 俊夫	前川 寛
平野 成美	田邊 猶太郎	宮脇 三一
平田 謙三	茶野 仁六	松本 時吉
増谷 宗	下根 信近	中濱 伴次郎
山添 眞二	三宅 元康	望月 鐘一
浦上 太吉郎	天野 與三吉	

● 林教授送別會

林教授が今回渡歐せらるゝ爲め教授が關係せられたる金澤醫學專門學校、金澤病院、金澤醫學會、日本小兒科學會金澤支部が發起さる九月二十三日金谷箱に送別の清宴を催されたり午後四時開場開會に先ちて滙界の大關辰燕が妙音を振つて「寶の入船」ある藝題の下に木ノ國屋文左衛門が立志談を語る七時頃開會佐々木教授が幹事一同を代表して開會の辭を併せて送別の辭を述べられ林教授の謙遜ある挨拶あり宴刻一刻酣とありし時室の中央に喝々の音あり一同靜まり顧みれば高安校長溫顔笑を湛へて起立林教授の健康を祝すべく發議され一同校長の發聲に和して林教授の萬歳を三唱し散會せしは午後九時なりき此日集まりしもの金澤醫學專門學校、金澤病院職員は勿論金澤醫師會、小兒科學會金澤支部の面々は勿論市内開業醫等無慮百有餘名ありき

朝晩がすかり涼しくあつた。今日は朝から美しい空が光つて見えた。濟々堂へ入るに、途々日光を浴びて來たほとぼりで、家を出るときは寒いと思つた肌膚から輕い汗さへ出た。しばらく待つた。第一鈴を聞いた。九時半である。開會の辭―河口君。雨森君が出て恭しく先生に送別の辭を上る。高橋君が目録を送呈する。先生の鄭重なる答辭を吾々は起立しうけたまはつた。先生は「ストラスブルヒ」で其地の二大家の下に藥物、小兒科を御研究なされ、餘暇を以て官命の學齡兒童の衛生事項の調査をなされるのである。下平先生はついて滞歐の三年有半を回顧し惻々の情を以て當時の感想を語られ、また松原先生林先生の先例に因み吾人の立志を促がされた。お話のうち、見もせぬ吾々さへベルリン街頭のカスタニア、モスコ、シベリアの初雪に對つて Adieu! と云ひたいやうな感じがされた。次に佐々木先生がにこ／＼として演壇に立たれた。にこ／＼した先生の口か

ら意外の大警策が下つた。「勉強しろく」といふのは漸教である。ほんたうはお前にはいらんたず、お前はお前のいらい事を覺悟すれいゝのだ」といふのは頓教であり。何事も信及ばざるのみ。這信さへおつたら。先生は、今日吾々には六祖大師であつた。次で松原先生が立たれた。先生の訓言は、いつも不用意でいつも開發的である。いつも無頓着でいつも格言的である。いつも譯がふくていつも直指人心的である。金玉の言葉は一個または數個必ず見出されるのである。僕のやうな冷たい胸もこれまで先生のお話には共鳴を感ぜぬことはあつた。如何なる時、如何なる事があらうとも、すべてを、すべてを自己一身に攝取しなければだめである。一身は即ち一心である。是を已に反るさういふ。「諸君が林先生の御恩に報ゆる所以は、只諸君にある。諸君が各々立志するにある」。つい見失つた主人公もこの一言で歸つて來ねばならぬ。終りに阿部先生が同様に送別の辭を述べられた。これで餘興。一辰燕の浪花節、大石山鹿送一段。華曲六段合奏、石川君の琴、北野君の尺八。琵琶歌、岩田君。落語等があつた。菓子子の袋くばられた。時計を見ると十二時だ。いふ過ぎてゐる。五時四十分の瀛車に發たれる大多忙の先生はこの時こあいさつをふされたので、生徒一同更に先生の御健康を祝し、佐々木先生發聲の下に先生の萬歳を三唱した。ふさ窓際に凭ると、白萩が搖いて秋風が顔を打つた。最後に岡田君の琵琶、城山があつて(後で日記を見ると今日の日附の下に西郷隆盛城山に戦死すこあつた。一寸妙である)閉會。

* * * * *

五時から一同先生を停車場にお見送りをした、生徒中の二少尉指揮の下に。先生はまたに別辭をたまはり、一同は萬歳を三唱して數千哩の程を祝した。(九月二十四日秋季皇靈祭の日)(J.F.)

●林教授の渡歐を送る

秋風梧葉を徙り天地肅靜たり此時吾等の敬仰する恩師林篤先生は渡歐の途に上らる

先生は實に三十七年を以て本校醫學科を卒業せられたる秀才にして三十九年母校の爲め藥物診斷の二講座を擔任し給ひし以來校に在りては鋭意後進を教導せられ院に在りては濟生の事に盡し給ひき

今や先生は年來の蘊蓄に飽き給はず更に斯學の蘊奥を極めんが爲め遠く獨逸國ストラスブルヒの學府に赴き給ふ吾等門下生にして加かも先生に兄事する輩は歡喜極まりて言ふ所を知らざるなり

以聞く先生は彼地に於て専ら藥物小兒科の二學を攻められんとす先生が天稟の學才と積年の研鑽とは必ず他日先生の頭上に月桂冠を戴かしめずんば止まざらん於是乎先生が歸朝の日は今より學界の期待と吾等の鵠首する所なり

嗚呼金城の天地に在る五百の弟子は春曉秋暮常に先生の健康を祈らん哉願くば先生學界の爲め加餐せられんことを謹んで先生の首途を送る

●講師岡本先生を迎ふ

林先生を送りて轉た寂寥の情に堪えざる時に當り吾等は岡本京太郎先生を迎へ大に意を強うするを得たり先生は本校出身者中夙に學德兼備の人として知られ曩きには母校の爲め教養に盡され後専ら濟生の道に従はれしも常に謹厚誠直名利を顧みず勵精研鑽以て學界に貢獻せられしこ辭しとせず殊に吾が雜誌部講話部等の爲め常に適當の一端を披瀝し給ふ後進爲めに私淑感謝措かざる所なり

今又先生繁多の身を以て吾等を育成せられんとす吾等の幸福何物か之に加

へん是より後先生の博識と德風に蕩ぜらるゝ吾等は脩養努力以て校風を發揚せんことを期す (高橋生)

●在外國會員の宿所

▲石森國臣氏 (三十二年卒業) 愛知醫專校生理學教授

Prof. Dr. K. Ishimori

Physiologisches Institut

Strassburg, Deutschland.

▲森田齋次氏 (三十二年卒業) 東京慈惠醫專校解剖學教授

Prof. Dr. S. Morita

Anatomisches Institut

Halle, Deutschland.

▲辻本辰之助氏 (三十三年卒業) 七尾私立病院長眼科専門

Dr. T. Tsujimoto

Japanische Botschaft,

Berlin, Deutschland.

▲小山田基氏 (三十六年卒業)

Dr. M. Oyama

bei Frau Wolff,

Daisenstrasse 13/e

München, Deutschland.

▲林篤氏 (三十七年卒業) 金澤醫專校小兒科及藥物學教授

Prof. Dr. A. Hayashi

Pharmacologisches Institut

Strassburg, Deutschland.

▲松久祐馬氏 (三十九年卒業)

Dr. Y. Matsuhisa

Waltherstrasse 25 I.

München, Deutschland.

●辭任及辭令

七月三十一日

兵式體操科ノ教務ヲ囑託ス

生徒課員事務ヲ囑託ス

月手當金二十圓給與

臨時雇申付

月俸金三十圓給與

依願雇ヲ解ク

八月五日(内閣)

任金澤醫學專門學校教授

叙高等官七等

全 (文部省)

年俸六百圓下賜

八月九日

金澤醫學專門學校外科學副手囑託 山田有登

加藤 信智

梅村 兵治

雇 越田惣太郎

從七從 久保 武

金澤醫學專門學校教授 久保 武

依願囑託ヲ解ク

金澤醫學專門學校書記 山本兵三郎

御用有之文部省建築課京都出張所へ出張ヲ命ス

八月三十一日

體操副科柔道教授方囑託 藤森千春

自今月手當金五圓給與

體操副科弓術教授方囑託 八島爲晴

自今月手當金五圓給與

體操副科劍道教授方囑託 北村義直

自今月手當金五圓給與

體操副科柔道師範補助囑託 吉田宗一

自今月手當金壹圓五拾錢給與

九月八日

岡本京太郎

小兒科學及診斷學講師ヲ囑託ス

月手當金三十圓給與

九月十二日

金澤醫學專門學校醫學士 馬詰定衛

外科學副手ヲ囑託ス

月手當金二圓給與

全 (文部省)

佐口榮

任金澤醫學專門學校助教授

八給俸給與

九月十四日(内閣)

林篤

任金澤醫學專門學校教授

叙高等官七等

全 (文部省)

金澤醫學專門學校教授 林篤

九級俸下賜

九月十六日(文部省)

金澤醫學專門學校教授 林篤

文官分限令第十一條第一項第四號ニ依リ休職ヲ命ス

九月十八日(文部省)

休職金澤醫學專門學校教授 林篤

歐洲各國ニ於ル學齡兒童ノ衛生ニ關スル事項調査ヲ囑託ス

命令

九月九日

教授 下平用彩

醫學科第四學年級長ヲ命ス

教授 醫學博士 松原三郎

醫學科第三學年級長ヲ命ス

教授 醫學博士 金子治郎

醫學科第二學年級長ヲ命ス

教授 石川喜直

醫學科第一學年級長ヲ命ス

教授 高山基重

藥學科第三學年級長ヲ命ス

教授 脇坂慶造

藥學科第二學年級長ヲ命ス

助教 林 常 雄

藥學科第一學年級長ヲ命ス

九月十二日

右物品檢閱委員ヲ命ス

教授 石 川 喜 直
教授 阿 部 莊 二
助教 林 常 雄
書記 川 島 俊

* * * * *

人事

●山崎教授

●宮田教授

●鬼頭教授

●松原教授

●同教授上京

去月末能登輪島地方へ衛生視察の爲め出張せられたり
能登地方「クル」病調査の爲め去月能登地方へ出張せられたり
同上
先月二十四日來羽咋教育講習會講師として一週間毎日
金澤より通講せられたり
東京帝國大學校吳秀三博士の在職十ヶ年祝賀會參列
の爲八月三十一日上京九月七日歸院せられたり

●高岡榮氏の昇任

騎兵第九聯隊附陸軍一等軍醫全氏(明治三十年

卒業)は去九月二十日附を以て陸軍三等軍醫正に進級せられ歩兵第三十六聯隊に補せられ尙ほ歸江衛成病院附に兼任せられたり。全氏は去九月二十二日鏑甚樓に於て知己三十余名を招待して甚だ盛大なる披露の宴を開かれたり。因に全氏の進級は陸軍部内に於ても異數の拔擢ありといふ。吾人は前途最も有望なる全氏の健康を祈りて止まず

●生沼曹六氏

全氏(三十一年卒業)は去四十一年九月東京慈惠會醫院醫學專門學校より歐洲に留學せられしが去八月十四日伯林を發程しシベリヤを経て去る八月二十八日歸朝せられ本郷區西須賀町十二番地に寓居せられたり。全氏は去る四十一年十一月獨乙に到り翌四十二年十二月迄ウエルツアルヒ大學の生理學教室に於てフライ教授に就きて研究し。全年十二月より翌四十四年十一月迄ライプツヒ大學の生理學教室に於てヘーリング氏に就き。全十一月より翌四十四年三月末日までボン大學の生理學教室に移りてウエルウオルン教授の下に研究し。最後に英國に渡り本年四月より七月末日に至る迄英國ケンブリッヂ大學の生理學教室に止りてラングラー教授に就て研究し。再び伯林に歸り愈々今同歸朝して舊校に生理學の教鞭を執らるゝことゝありたるあり。全氏は益々健康にして明年夏季には墓參のため金澤に歸省せらるゝと云ふ。吾人は吾校出身の全氏。純學問に一身を犠牲に供せる全氏。朝夕研究に熱心なる篤學の全氏。春秋に富みて前途甚だ多望ある全氏。中央醫學界に一明星たる全氏の益々自愛せられことを祈る

●久保武氏

全氏(三十一年卒業)は卒業後金澤病院婦人科にありて故小川教授に師事し後東京醫科大學解剖學教室に入りて故田口博士の助手となり更に京都醫科大學解剖學教室に轉じて鈴木博士の助手となり終に明治三十五年名古屋の愛知醫學專門學校の教諭に昇進し三十八年朝鮮大韓醫學學校の解剖學教授となり汝々韓人の醫育に従事せしが昨年冬同醫學學校の官制改革によりて同校を辭して歸朝し爾來東京醫科大學解剖學教室に入り

(會告)

大澤、小金井兩博士に就きて多年全氏が朝鮮にあつて蒐集せし朝鮮人の頭蓋の測定に従事中ありしが此夏滿州奉天府に開設せらるべき南滿醫學堂の解剖學教授に内定し兼て本校の教授に任じられ八月十日名古屋を發して渡清し暫く大連醫院に止りて奉天に向はれたり。吾人は研究心に甚だ熱烈なる全氏の前途を祝し再度までも異域に奮闘する快男子の健康を祈る

●林教授の新任と留學

林篤氏は明治三十七年本校醫學科を卒へて内科第二部醫員となり佐々木教授の下に研究し明治三十九年本校講師を囑託せられて以前島田吉三郎氏の擔當せられし診斷學と山崎教授の擔當せられし藥物學との教授に従事せられ日夜斯學と内科病の臨床との研究せられしが此度終に本校教授に昇進せられ全時に私費を以て遠く歐洲留學の途に就かれたり。全氏は在學中常に優等の成績を占め學究に熱心にして今や實地の經驗に富み加之性質溫良。人格高尚。注意周到誠に醫人の好型あり。小成に安んぜずして今や留學の途に上れり。歐洲の鴻學と天地さは必ず全氏の恰才を啓き全氏の博學を深くし全氏の人格を更に高好せん。全氏が二年の後ち多大の業績を挙げ錦を飾て吾母校に歸らるゝの光景既に吾人の眼前に髣髴たるを覺ゆ。吾人は吾校の會員諸氏が全氏に學ぶ所ありて益々奮勵努力。益々發展向上せられんことを切望して止まず

●岡部千太郎氏 全氏(四十三年藥學卒業)は以前朝鮮仁川に開業中ありしが此度歸國して廣島縣立病院藥局に奉職せらるゝことなれり

* * * * *

會 告

●自明治四十四年八月十六日校外特別會員會費調書
至全 九月廿五日

金額	期限	氏名
金參圓	自四十四年度五ヶ年分	鈴木於菟 吉君
金參圓	自四十八年度	野嶽利 七君
金參圓	全	柳原茂 樹君
金五圓	自四十二年度七ヶ年分	厚 季君
金參圓	自四十八年度五ヶ年分	佐崎伊 久君
金參圓	自四十七年度五ヶ年分	南 茂 吉君
金參圓	自四十三年度三ヶ年分	高橋重 二君
金參圓	自四十七年度五ヶ年分	西 正 胤君
金參圓	全	宇野 正君
金參圓	自四十三年度五ヶ年分	來間隆 次君
金參圓	自四十七年度五ヶ年分	眞柄佐一 郎君
金參圓	自四十四年度三ヶ年分	中須熊 藏君
金參圓	全	笹田順 二君
金參圓	自四十一年度三ヶ年分	松井源 長君
金參圓	自四十三年度三ヶ年分	伴 鐸 也君
以上		